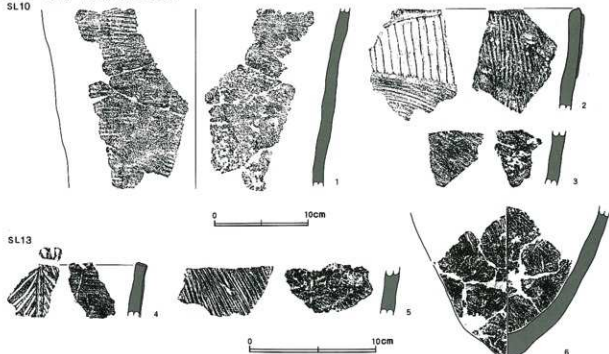


第35図 第10・13号炉穴出土土器



ている。口縁直下に穿孔がある。

2は口縁に近い部分の破片、外反する器形の屈曲部にタガ状に隆起線文が施され、口縁部文様帯を区画する。太く浅い沈線文が曲線的に施され、集合沈線が空間を充填する。11は2と同一個体、口縁部破片で、丸棒状に成形され、口唇には刻目文が付けられる。

3は胴下半の部位にあたる。器面には条痕文が、内面には刺痕が施されている。

4は口縁部から胴部にかけての破片、推定口径は17cm、推定器高は25cmである。やや内湾して立ち上がり、口縁が緩く外反する器形が考えられる。口縁は丸棒状で、直下に穿孔が加えられる。器内外面には、条痕文が施されている。

6～9は、1と同様に細隆起線文と集合沈線文の組み合わせによる文様が施されている。6は口縁部破片、角頭状の口縁で、口唇には刻目文が付けられている。

13は沈線と押引き的な連続刺突文で、文様が描かれている。口縁部破片で、小波状を呈するものと思われる。口縁は角頭状であり、口唇には刻目文が施される。

10・14～22は胴部破片で、条痕あるいは刺痕を器内外面に施したものである。

以上は後述する第1群第1類及び第2類に属するものと思われる。

石器は、第36図4の打製石斧が1点出土した。

第8号炉穴 (第31図)

I・K34区、第5号炉穴から南東へ約24mの地点に位置する。平面形状は、南北方向に長軸線をもつ不正楕円形、規模は南北方向4.7m、東西方向は最長部で3.0mである。

遺構北側がやや深く掘り込まれており、深さ45cm前後、南側は30cm前後である。炉址は北端部に1基設けられていた。掘り込みはなく、焼土の堆積が認められるだけである。

第9号炉穴 (第33図)

調査区南側のH50・51区に位置する。完掘できなかったために、形状、規模は不明であるが、北方向へ突出した壁ぎわに、2基の炉址を検出した。

炉址は深さ10cm前後の掘り込みをもち、よく焼けており、固く締まった炉床である。

第10号炉穴 (第33図)

J・K、48・49区、第9号炉穴から北東へ約28mの地点に位置する。掘削が徹しく全体的な平面形状は、

不明瞭であるが、炉址ないしはその痕跡が10基検出されていることから、相当の規模をもつものと推定できる。

あるいは、北側の大きなまとまりと、南側で2基の炉址が検出された掘り込みが連結せず、それぞれに独立した遺構であることも考えられる。

炉址の掘り込みは深く、よく焼けており、固く締まった炉床である。

出土遺物 (第35図1～3)

土器が少量出土した。1は深鉢形土器の胴部にあたる大型破片、器面には条痕が、内面には擦痕が施される。2は口縁部破片である。やや内削ぎ気味の口縁で、小突起をもつ。細隆起線文による区画内に、縦位の集合細隆起線文を充填施文する。2は後述する第1群第1類に、1・3は第2類に該当する

第11号炉穴 (第34図)

K51区、第9号炉穴から南東へ約20mの地点に位置する。完掘できなかったが、平面形状は、東西方向に長軸線をもつ楕円形であることが考えられる。西側端部に炉址を検出した。

第12号炉穴 (第34図)

調査区中央の北側、H24区に位置する。H24区では、

次に述べる第13・14号炉穴を含め、3基の炉穴が集中して発見された。

一部攪乱を受けるが、東西方向に長軸線をもつ楕円形の平面形状が考えられる。東端部に炉址が設けられている。

第13号炉穴 (第34図)

第12号炉穴の南側に隣接する。一部攪乱を受けるが、平面形状は、南東から北西方向に長軸線をもつ楕円形であると思われる。南東側の端部に炉址を設ける。炉址の掘り込みは深く、よく焼け、固く締まった炉床である。

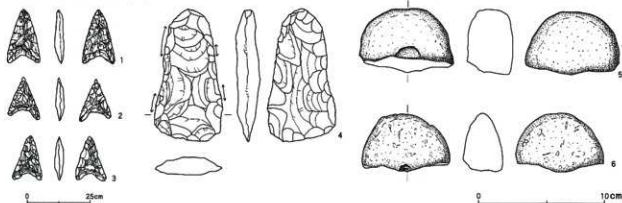
出土遺物 (第35図4～6)

4は口縁部破片、角頭状の口縁は刻目文が施され、垂下する細隆起線文と集合沈線文で文様が描出される。6は底部の大型破片、先端が突起状となる。4は後述する第1群第1類に、5・6は第2類に属する。

第14号炉穴 (第34図)

第12号炉穴の北側に隣接する。部分的に攪乱を受けるが、南北方向に長軸をもつ楕円形の平面形状である。北端部で炉址を検出した。

第36図 炉穴出土石器(1)



第2表 炉穴出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
37図-1	石 鏃	2.2	0.31	0.27	0.69	チャート	S L 2	
-2	石 鏃	1.6	1.21	0.28	0.36	チャート	S L 2	
-3	石 鏃	1.77	1.2	0.38	0.55	チャート	S L 4	
-4	打製石斧	10.35	5.26	1.85	117	砂 岩	S L 7	
-5	磨・凹石	(4.64)	7.35	3.55	(210)	安山岩	S L 3	
-6	磨石	(4.64)	6.96	3.04	(75)	砂 岩	S L 4	

第37図に示した大形の尖頭器は、第5号炉穴の壁面にへばり着くように出土した。側縁が緩やかな曲線を描く、木葉状の形態で、基部を欠損する。

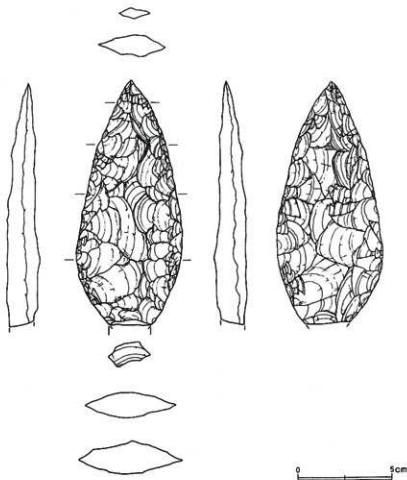
本来は左右対称形を成すものと思われるが、両側縁の描く曲線が一致せず、ややバランスを崩している。厚さは、先端部に向けて徐々に薄くなる。

最厚部、最大幅ともに身中央よりやや下位にあり、

横断面は、ほぼ凸レンズ状に一定している。側縁からの調整は、特に先端部について丁寧な加工が施されている。法量は、長さ12.8cm、幅5.5cm、厚さ1.7cmで、細粒砂岩製である。

縄文時代草創期、あるいは先土器時代終末期までさかのぼる時期の所産であり、炉穴から出土したことは明らかな混入である。

第37図 炉穴出土石器(2)



(2) 柄鏡形敷石住居跡

柄鏡形敷石住居跡は、調査区中央の平坦部で2軒発見された。調査区中央の東側は、昭和47年に埼玉県教育委員会が発掘調査を行った坂東山遺跡B地点に接しており、当時の調査では、柄鏡形敷石住居跡が、3軒発見されている。今回の調査では、その分布域がさらに西側に広がる事が確認できた。

第1号柄鏡形敷石住居跡は、調査区中央の北側寄りI24区とJ24区の境に位置する。

また、第2号柄鏡形敷石住居跡は、第1号柄鏡形敷石住居跡から南へ約28mの地点、J26とJ27区の境に位置する。2軒の住居跡は、張出部と炉を結ぶ主軸線が、北西から南東方向で一致する。

第1号柄鏡形敷石住居跡 (第38、39図)

第1号柄鏡形敷石住居跡は、遺存状態が大変良好で

あった。遺構確認段階で、壁ぎわを巡る円形の石の配列と、張出部の覆土から石の一部が覗いているのを、確かめることができた。

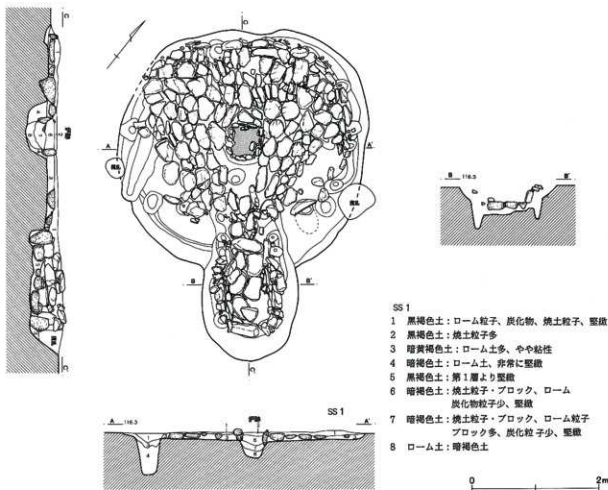
平面形状は、円形の主体部に、楕円形の張出部が南東方向に突き出しており、いわゆる柄鏡形である。

規模は、張出部を含めた主軸線上の径が5.2m、主体部の東西径が3.9mである。張出部は、連接部から先端まで1.8m、東西方向の短径が1.5mである。

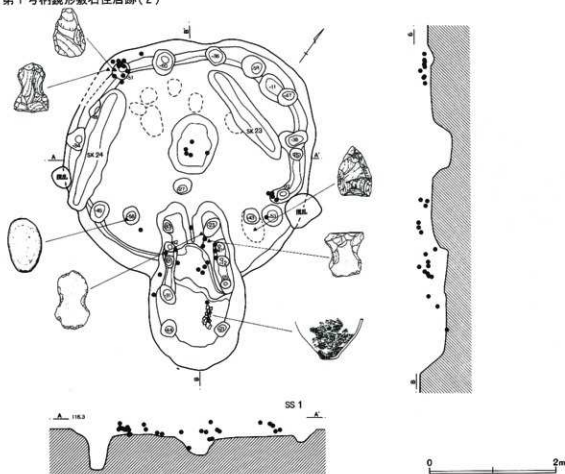
敷石面までの覆土の堆積は非常に浅く、4~10cmである。ただし、張出部は、敷石面までの深さが30cm前後ある。

敷石は、平地に施設したものではなく、あらかじめ掘り窪めた竪穴内に行われている。主体部の南東隅と南隅は、敷石が乱れ、一部敷石を欠くが、本来は、竪穴全面に敷石されていたものと思われる。また、炉の

第38図 第1号柄鏡形敷石住居跡(1)



第39図 第1号柄鏡形敷石住居跡(2)



南側も敷石2ないし3個分の空間がある。

竪穴の壁に沿って緑石が巡っており、これは偏平な河原石を横位に立てて使用している。緑石の内側から直ぐに河原石が敷き詰められている。

主体部の敷石面はほぼ平らで、接続部付近から張出部先端に向けて緩く傾斜する。ただし接続部と張出部の先端では、大型の河原石を横位に立てて埋設し、一段高く階段状につくられている。

敷石の施設は、極めて緻密である。使用する石はひと抱えもあるような河原石で、石質は砂岩が多くを占め、チャートがこれに加わる。

敷石面を平らにするために、河原石の平坦面が表になるように上手く埋設してある。石を加工して平坦面をつくりだしたものは、ごくわずかである。そして、拳大以下の小さな石で、大型の河原石の隙間を埋めている。

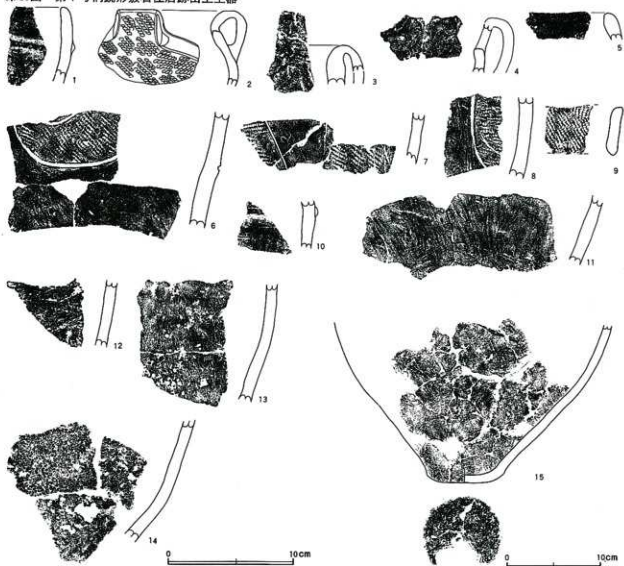
敷石の施設には、一定の規則性があることが窺える。使用する石に方形や楕円形のものが多く使われたことから、石の長軸線を求めると、炉を挟んで東西に別れた敷石に、張出部へ向けて長軸線を揃える傾向が認められるのである。

張出部の敷石面は、主体部に比べ約20cm高い。張出部の東西壁ぎわは、高さ約30cm、3段から4段にわたって石を横位に積み上げている。ただし先端部東側の石は縦位に施設されている。

炉は主体部中央に位置する。長径60cm、短径55cmの方形石囲い炉で、深さ30cm前後に掘り込まれている。炉はよく焼けており、炉床は固く締まっているが、焼土層は検出できなかった。燃焼後の残土を掻き出した可能性がある。炉を囲う石は、火熱のため赤化し、砕いたように割れていた。

敷石を外し、竪穴の掘り方を検出した。主体部では、

第40図 第1号柄鏡形敷石住居跡出土土器



敷石上面と地山との間に10cm前後のレベル差があり、地山面には敷石の凸面を埋め込んだ凹凸がある。

壁ぎわは、浅く掘り窪められており、15本の壁柱穴が巡っていた。径は、大きいもので40cm前後、小さいものは20cm前後で、深さは10～60cm前後である。

張出部は、中央に断差があり、壁は傾斜して立ち上がる。深さは、遠構確認面から約40cmである。先端部両側にビットが検出された。ビットの径は25cm前後、深さは21cmと44cmである。

連接部には、溝で連絡した4基のビットが、主軸線を挟んで、左右対象の位置に設けられていた。ビットの径は20～35cm前後、深さは10～40cm前後で、溝は深さ10cm前後である。また、炉の南側、主軸線よりやや

西に振れた地点にも、ビット1基が検出された。

なお、敷石の下からは、第23、24号土壌が検出された。

出土遺物 (第40、41図)

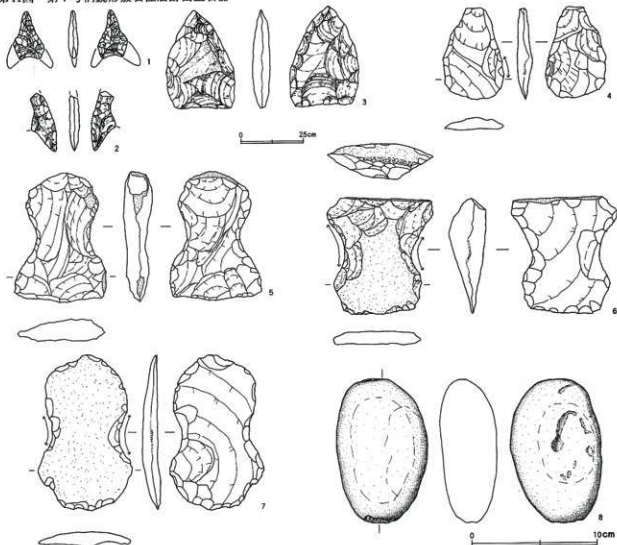
遺物は、覆土が浅かったことから、あまり出土していないが、北西隅の壁柱穴と連接部付近から、接合した土器や同一個体と思われる土器が、ややまとまって出土した。また、敷石下の掘り方内からは、ほとんど遺物は出土しなかったが、張出部先端から器形復元可能な一括個体1点と、欠損した石鏝1点(第41図2)が出土した。

第40図1は深鉢形土器の口縁部破片、やや湾曲して直立する器形が考えられる。断面三角形の隆起線文が

口縁に平行してめぐり、口縁部の無文帯を区画する。

2～4は、口縁部につけられた把手部の破片である。2は波状口縁を呈する深鉢形土器の波頂部につくものと思われる橋状把手。口縁部無文帯を区画する細く浅い沈線文は、橋状把手の下端接合部に連絡する。把手上端から縄文LRを充填施文する。

3、4は口縁部につけられた把手の部分破片で、無
第41図 第1号柄鏡形数石住居跡出土石器



第3表 第1号柄鏡形数石住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
41図-1	石 鏃	(1.92)	(1.1)	0.36	(0.75)	チャート		
-2	石 鏃	(2.38)	(0.98)	(0.28)	(0.62)	チャート		
-3	石 鏃	3.97	2.72	0.86	9.84	チャート		
-4	打製石斧	7.34	4.76	1.17	43.0	砂 岩		
-5	打製石斧	10.33	7.17	2.18	145.0	粘板岩		
-6	打製石斧	9.14	8.45	2.95	220.0	砂 岩		
-7	打製石斧	12.26	7.54	1.64	143.0	砂 岩		
-8	敲 石	11.23	7.08	4.3	500.0	砂 岩		

線文が、器面に強く描かれ、沈線区画内には縄文LRが充填施文される。

7は北西壁の柱穴付近から出土した。細い沈線文が直線的に懸垂し、区画内に縄文LRが施文される。

10は口縁部に近い部位の破片で、横位の隆起線文が施されている。

11～14は無文の胴部破片である。11は器面を平滑にナデている。13は器面に擦痕状の整形痕を残す。

15は、張出部先端で、敷石を外した下から出土した。鉢形土器の胴下半部の大型破片である。現存する胴部の最大径は29cm、現存高は17cmである。小さな底部から大きく開き、胴上半で湾曲して立ち上がる器形である。破片上端の部位に、懸垂する低い隆起線文の先端がわずかに認められる。

以上の土器は、後述するグリッド出土の第IV群土器に属するものと思われる。

石器は、石鏃3点と打製石斧4点、そして蔽石1点が出土している（第41図）。

第2号柄鏡形敷石住居跡（第42、43図）

第2号柄鏡形敷石住居跡の遺存状態も良好であった。

平面形状も、第1号柄鏡形敷石住居跡と同様に柄鏡形である。

規模は、張出部を含めた主軸線上の径が5.7m、主体部の東西径が3.7mである。張出部は、接続部から先端まで2.2m、東西方向の短径が1.6mである。第1号住居跡とはほぼ同規模であるが、張出部の長軸径がやや長い。

主体部の敷石面までの深さは20cm前後で、張出部は40cm前後である。

敷石は、竪穴内に全面的に敷き詰められていたものと思われる。現状では、主体部の炉の周囲から北西壁ぎわまでと、主体部と張出部を繋ぐ接続部、そして張出部の南側の一部と南北両壁ぎわに敷石が残っている。

縁石も、竪穴の壁に沿って全周していたものと考えられる。西側の奥壁部から接続部まで、飛び飛びに残

る縁石を確認できた。

敷石は、さまざまな形の河原石を上手く組み合わせ、出来るだけ間隔を置かないように施設されている。河原石の平坦面を表にすることで、主体部の敷石面はほぼ平らである。

主軸線上の炉から張出部までは、炉に接して据えられた石皿を含め、4個の大型の石が直線的に置かれている。また接続部には、偏平な石を横位に立て、主体部と張出部の境としている。

張出部の敷石は、接続部から先端に向けて緩く傾斜するようである。張出部の敷石面は、主体部に比べ約30cm深く、南北壁は高さ50cm前後である。現状では壁ぎわに一列の立石が残るだけであるが、張出部の覆土中に大型の石が詰まるように出土したことから、2段、3段と石を積み上げていたように推測される。そして張出部の先端は、大型の石を横位、2段に立てて埋設し、階段状につくられている。

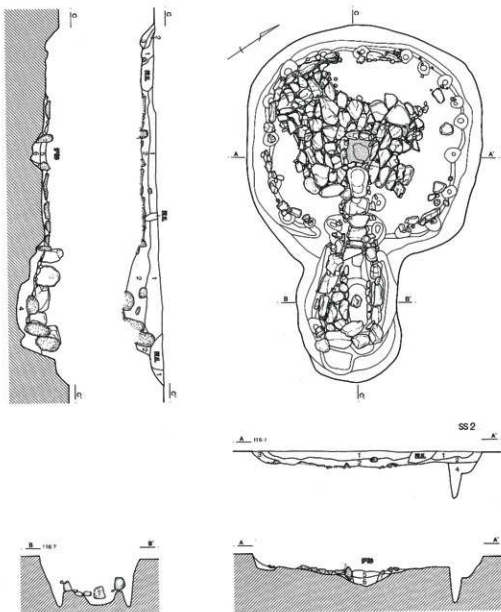
炉は主体部中央に位置する。径60cmの方形石囲い炉で、深さ20cm前後、すり鉢状に掘り込まれている。炉はよく焼けており、炉床は固く締まっていた。炉を囲う石は、火熱のため赤化し、崩落していた。

敷石を外し、竪穴の掘り方を検出した。主体部では、敷石上面と地山との間に10cm前後のレベル差があり、地山面には敷石の凸面を埋め込んだ凹凸がある。

壁ぎわは、浅く掘り窪められており、17本の壁柱穴が巡っていた。径は20～30cm、深さは20～80cm前後である。

張出部は、中央部が深さ20cm前後に掘り込まれ、壁はやや傾斜して立ち上がる。深さは、遺構確認面から約70cmである。先端部は、階段状に2段に掘り込まれ、両側にビットが検出された。ビットから接続部まで、壁ぎわに周溝状の溝が設けられており、接続部では、大小2基の対ビットが検出された。先端部のビットの径は30cm前後、深さは30～40cm前後で、対ビットは径40～50cm前後、深さは40～60cm前後ものと、径25cm前後、深さは20～30cm前後のものである。また、溝は幅25cm、深さ10cm前後である。

第42図 第2号柄鏡形敷石住居跡(1)



SS 2

- 1 黒褐色土：ローム粒子、焼土粒子少、炭化物、堅緻
- 2 黒褐色土：第1層類似、ローム粒子多、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム土多、やや粘性
- 4 暗褐色土：ローム土多

SS 2 炉跡

- 5 暗茶褐色土：焼土粒子少、白色微粒子多、堅緻
- 6 暗赤褐色土：焼土粒子多、ローム粒子少、やや粘性、堅緻
- 7 黒褐色土：ローム粒子多、焼土粒子少、堅緻、全体赤化

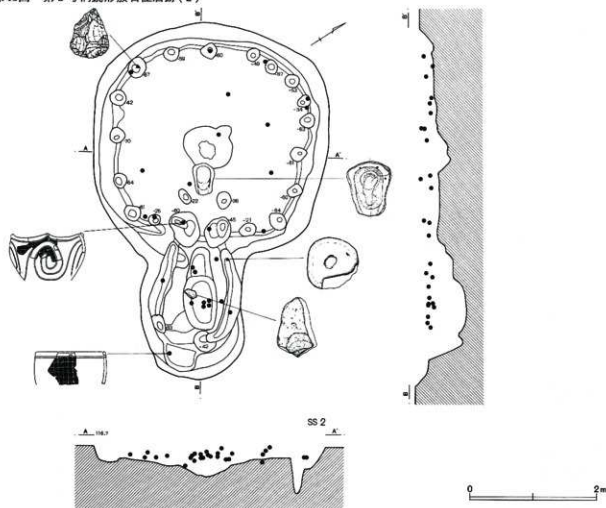
出土遺物 (第44、45図)

遺物の出土量は少なく、第43図のとおり散漫な出土状況を示している。とくに敷石下部からの出土例はない。ただ特筆すべきは第45図3の石皿の出土状態で、

炉に接した南側で、表面を上にした正位の状態ではぐえられていた。炉に接した一部は、火熱により赤化していた。

第44図1は、接続部の対ビットの上から出土した。

第43図 第2号柄鏡形敷石住居跡(2)



深鉢形土器の口縁部破片である。推定口径は21cm、内湾する口縁部から、胴部で括れる器形で、4単位の波状口縁の土器である。波頂部に小突起が貼り付けられ、浅い刺突文が加えられる。小突起を結ぶように、口縁に平行して沈線文が施され、口縁の無文帯を区画する。口縁部には2本一對の平行沈線文により、4単位の渦巻文が描かれるものと思われる、区画内に縄文RLを充填施す。

2は、張出部の先端から出土した。口縁部がやや内湾ぎみに直立する器形の土器で、推定口径は21cmである。口縁に平行して横位の隆起線文を施し、幅の狭い口縁部無文帯を区画する。また、口縁直下には直径5mmの穿孔がある。胴部には隆起線文の下端にかかる位置から縄文LRが施文される。

3～8は深鉢形土器の口縁部破片である。3は口縁

部がやや内湾ぎみに直立する器形で、横位の沈線文が口縁部無文帯を区画する。胴部には縄文Lを施文する。

4は口縁が直線的に立ち上がる器形、口縁に平行して施文された隆起線文が、やや幅のある口縁部無文帯を区画し、胴部には横位の隆起線文に接続した隆起線文が垂下する。胴部区画内には横位の隆起線文から縄文Lが施文される。

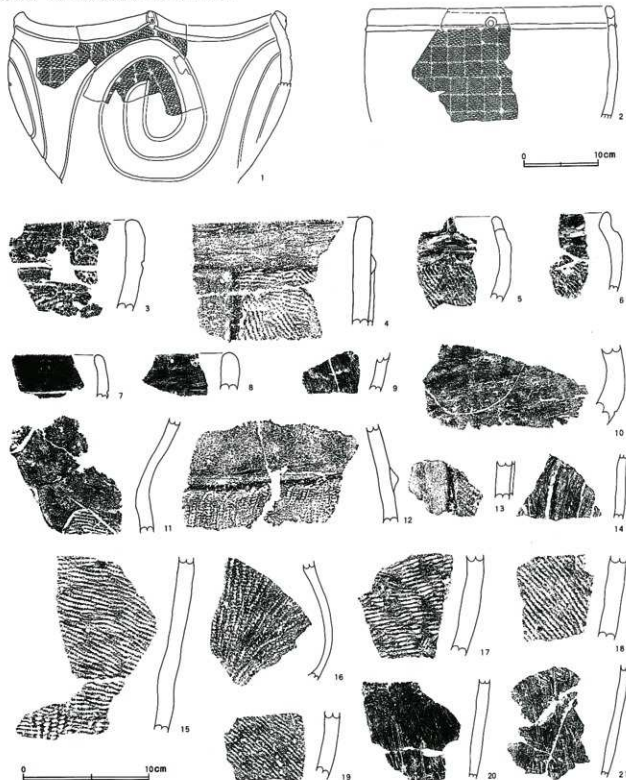
5は小突起をもち、口縁部が内湾する器形で、幅の狭い口縁部無文帯の下に縄文LRを施文する。

6の器形は、内湾して立ち上がり、口縁が「く」の字に屈曲して外反する。口縁直下に凹線状の狭い無文帯がめぐり、その下に縄文Rを施文する。

7、8は口縁部無文帯の破片、7は無文帯を区画する横位の沈線が施されている。

9～21は胴部の破片である。9は細く鋭い沈線文が

第44図 第2号柄鏡形敷石住居跡出土土器



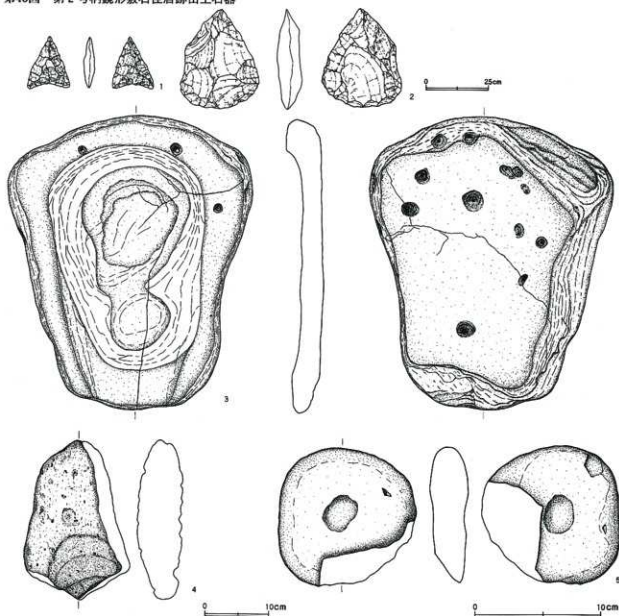
垂下し、10は細く浅い沈線文が曲線的に描かれた、胴下半部の破片である。

11は胴括れ部の破片で、「U」字状の文様が上下2段に沈線で描かれ、区画内に縄文RLを充填施文する。

12は、口縁に近い部位の破片で、幅広い口縁部無文帯を区画する隆起線文が横位にめぐり、胴部には、隆起線文の下端にかかるように縄文LRを施文する。

13、14は隆起線文が垂下する。13は縄文RLが施文さ

第45図 第2号柄鏡形敷石住居跡出土石器



第4表 第2号柄鏡形敷石住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
45図-1	石 鏃	2.07	1.57	0.4	1.03	チャート		
-2	石 鏃	3.96	3.15	1.09	12.36	チャート		
-3	石皿・凹石	44.4	36.3	7.5	15,500.0	緑泥石片岩		
-4	石 皿	(25.3)	(17.0)	(7.6)	(3,340.0)	凝灰岩		
-5	磨・凹石	(10.95)	(10.6)	(2.91)	(468.0)	砂 岩		

れ、14は器面の整形痕が明瞭に残る。

15は縄文LRと下端の一部に縄文RLが施されてお
り、16は縄文LR、17～19は縄文Lが施文されている。

20、21は無文のもので、同一個体である。器面を平
滑に整形した擦痕が残る。

以上の土器は、後述する第IV群土器第2～3類に属

するものと思われる。

石器は、先に述べた石皿の他に、石鏃2点と、欠損した石皿、凹石が出土した（第45図）。

(3) 土 壤

縄文時代の土壌は、70基発見された。その多くは調査区中央の平坦部に集中して発見されており、小支谷を隔てた調査区南側では散見される程度であった。これは早期後半の穴の分布状況と同様の傾向である。

土壌は形態的にみて、以下のとおり、A～Fの6類型に分けることができる。

A類：平面の形状が円形で、壁は垂直かやや傾斜をもって直線的に立ち上がる。しっかりと掘り込まれており、墳底は平らで、断面の形状が鍋底状となる。

覆土中位から下位にかけて、大型の河原石がまともに出土したものがある。

規模は、直径1m前後ものが主体であり、まれに大きなもので1.5m前後、深さは0.5m前後、深いもので0.8m前後である。

B類：平面の形状はA類と同じ円形であるが、掘り込みが深く、壁は傾斜しており、開口部に比べ、墳底は相対的に小さくなる。

規模は、直径が1.3m～1.5m、深さは1.5m～2.0mである。

C類：平面の形状は円形または楕円形である。掘り込みが浅く、壁は緩やかに傾斜しており、断面の形状が皿状あるいは碗状となる。浅い小ピットをもつものがある。

縄文土器の一括個体が出土したのは、この形態の土壌からである。

規模は、大小の幅があって、長径が1.0～2.0mで、短径は1.0m前後、深さは0.13～0.37mである。

D類：平面の形状は、方形または楕円形である。壁は傾斜して立ち上がり、墳底は平坦である。大型の礫をとまうものがある。

規模は、長径1.68～2.82mで、短径0.85～1.20m、深さは0.32～0.80mである。

E類：平面の形状は長楕円形である。壁は傾斜して立ち上がり、墳底の幅は極端に狭い、いわゆる落とし穴とされるものである。

今回の調査では、第1号柄鏡形敷石住居跡の下から2基（第23、24号土壌）発見されており、縄文時代のものとした。

規模には大小があり、長径1.80～4.52m、短径0.38～1.72m、深さは0.56～1.55mである。

F類：形態が不定形であるなど、A～E類に該当しないその他のものである。

時期は、中期から後期前半のものが主体であり、A及びB類がその典型的なものとえよう。しかしC類からも該期の土器がまともに出土しており、等外視できない一群である。

各土壌の詳細は、一覧表に示した。ここではその中から代表的なものについて述べておきたい。なお、出土遺物については、後で一括して説明する。

第1号土壌（第46図）

N6区、国道を挟んで東側の調査区北斜面に1基単独で発見された。平面の形状はほぼ方形で、D類に該当する。覆土中位に、人頭大から拳大の河原石がまともに30点余り検出され、その中には焼礫も含まれていた。

第14、17、18号土壌（第46図）

調査区北側の緩斜面には、A類に該当する第14、17、18号土壌が点在する。第14号土壌から南へ約36m隔てて第17号土壌が、さらに約16m南には第18号土壌が位置する。第17、18号土壌の下層からは礫がまともに出土した。礫の出土状況には、墳底に敷きつめるなど、規則的に配置したような形跡は認められず、部分的に偏った状態で検出された。

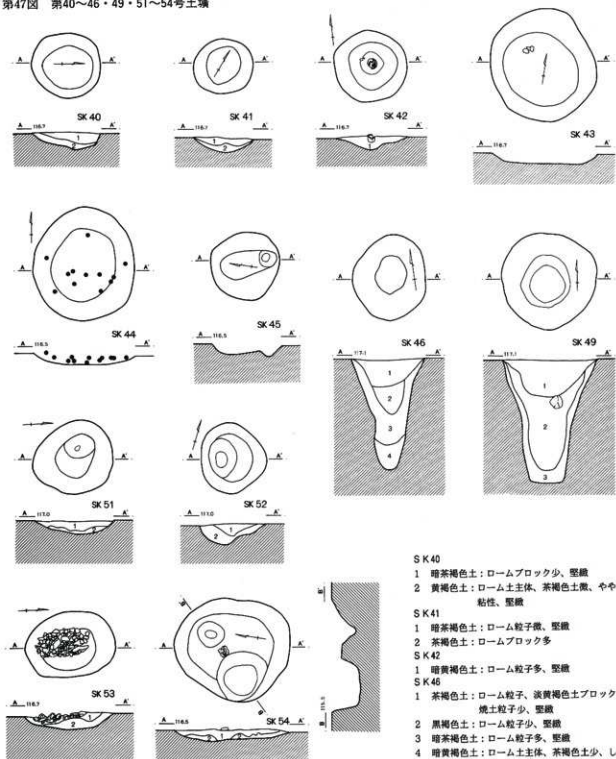
第17号土壌は、重さ6kg前後のひと抱えもあるような大型の礫から、拳大のものまで10点が出土し、石質はチャートと砂岩、火熱により赤化したものが4点ある。第18号土壌も同じような礫が18点出土し、そのうち赤化したものは12点である。

第17号土壌から第56図12の土器が出土した。

第46図 第1・14・15・17・18・27・33・37・38号土壤



第47図 第40～46・49・51～54号土壇



SK 51

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子少、緻密
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック少、緻密

SK 52

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック主体、茶褐色土少、堅緻

SK 53

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子・ブロック、焼土粒子少
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、堅緻

SK 54

- 1 暗褐色土：ローム粒子、焼土、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム土を多、きわめて堅緻

SK 40

- 1 暗茶褐色土：ロームブロック少、堅緻
- 2 黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土微、やや粘性、堅緻

SK 41

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子微、堅緻
- 2 茶褐色土：ロームブロック多

SK 42

- 1 暗黄褐色土：ローム粒子多、堅緻

SK 46

- 1 茶褐色土：ローム粒子、淡黄褐色土ブロック、焼土粒子少、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子少、堅緻
- 3 暗茶褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 4 暗黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土少、しまりがない

SK 49

- 1 暗褐色土：ローム粒子、焼土粒子少、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子・ブロック、やや堅緻
- 3 黒褐色土：ローム土多、第2層に類似

0 2m

第27号土墳（第46図）

K24区、調査区中央の東側調査区境で発見された。最も近い第33号土墳から、北西方向に約19m離れて位置する。大型の土墳で、平面の形状は楕円形、D類に該当する。

覆土上層から中層にかけて、大小あわせて31点の礫が出土した。石質は砂岩、チャートが主体を占め、花崗岩、ホルンヘルスが各1点ある。そのうち3点が赤化していた。

土器片も40点余り出土しており、図示したもの（第59図1～8）は、後述する。

第33号土墳（第46図）

J26区、第2号柄鏡形数石住居跡から、北へ約5m離れて位置する。平面の形状は円形で、分類上はA類とB類の中間にある。

第59図9～11の土器が出土した。

第37号土墳（第46図）

K・L27区、第2号柄鏡形数石住居跡から南東方向へ約11mの距離に位置する。平面の形状は円形で、C類に該当する。

深鉢形土器の完形個体が正位の状態で出土したが、遺構確認面はその下であり、遺物が先に検出された後、慎重に精査した結果、浅い掘り込みを確認した。

出土土器（第59図12～16、第60図1）については、後述する。

第42号土墳（第47図）

K29区、C類の第40号土墳から南東方向へ約4mの距離に位置する。平面の形状は円形で、小型の土墳である。C類に該当する。

器形復元可能な一括個体（第60図4）が、覆土中に突き刺さるように、正位で出土した。

第44号土墳（第47図）

J28区、第42号土墳から南東方向へ約8m離れて位置する。平面の形状は円形で、C類に該当する。

覆土から12点の土器が出土し、第59図17～19を図示した。

第46、49号土墳（第47図）

G30区、2基の土墳は、南北方向に約6m離れて位置する。形態も共通しており、B類に該当する。

第49号土墳の覆土中層から大型の礫が検出され、第56図26～28の土器が出土した。

第53号土墳（第47図）

J・K30区、C類の第43号土墳から南へ約7mの距離に位置する。平面の形状は楕円形で、C類に該当する。

覆土上層の中央に集石をとまう。小粒のものを主体に131点の礫が出土し、33点が赤化していた。

第59図33～36の土器が出土した。

第54号土墳（第47図）

K30、31区に位置し、周辺では第55～58号土墳が集中して発見された。平面の形状は楕円形で、C類に該当する。

覆土上層から、磨製石斧と打製石斧各3点（第62図7、8、13）が出土した。

第55、57号土墳（第47図）

K31区、東西に約5mの距離を隔てて発見された。C類の第56、58号土墳が隣接する。平面の形状は円形で、A類に該当する。

第59、60、61号土墳（第48図）

3基の土墳は、I31区でまとまって発見された。第59号土墳の平面形状は楕円形、第60号土墳も楕円形、第61号土墳は円形で、いずれもC類に該当し、第60、61号土墳の墳底は、小ビット状に浅く掘りくぼめてあった。

各土墳からは、第57図と第58図の完形個体が出土した。第59号土墳からは第57図1が横倒しにつぶれて、また2と3は入れ子の状態で出土した。

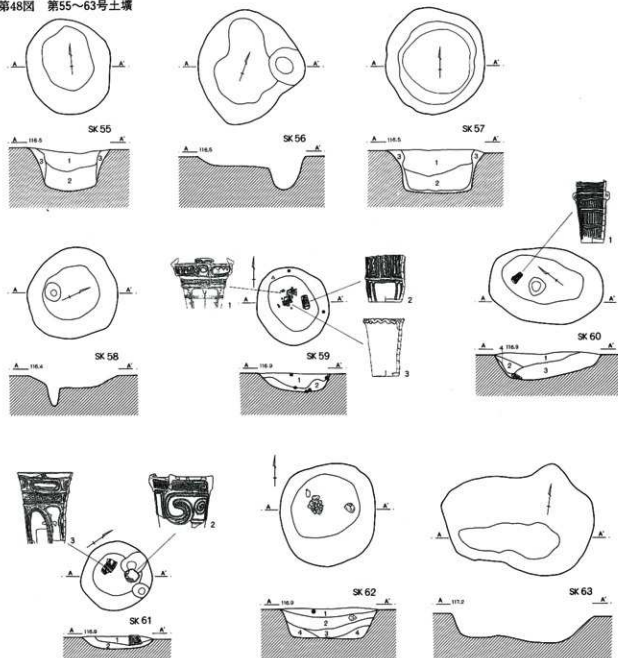
第58図1は、第60号土墳の墳底からころがるように出土した。

第58図2は、第61号土墳に逆位に伏せて埋設されており、3は覆土上層からつぶれた状態で出土した。

第64号土墳（第49図）

H32区に位置し、南側に第5号炉穴が隣接する。平面の形状は不定形で、F類に該当する。壁は緩やかに

第48図 第55～63号土壇



SK 55・57

- 1 暗褐色土：炭化物・焼土粒子、ローム土、きわめて堅緻
- 2 黒褐色土：第1層より炭化物・焼土粒子多、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム土

SK 59

- 1 暗茶褐色土：ローム・焼土・炭化物粒子少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子多、焼土・炭化物粒子少、堅緻

SK 60

- 1 黒色土：ローム粒子少、堅緻
- 2 暗黒褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 3 黒褐色土：ローム粒子多、同ブロック、焼土・炭化物粒子少、堅緻

- 4 暗黄褐色土：ローム土主体、黒褐色土少、やや粘性、堅緻

SK 61

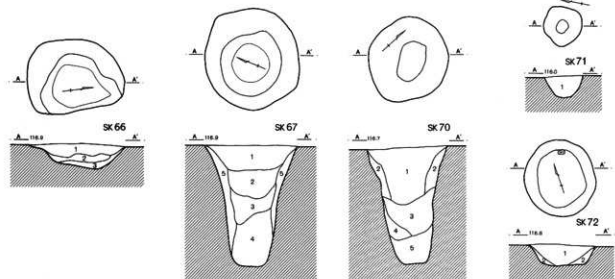
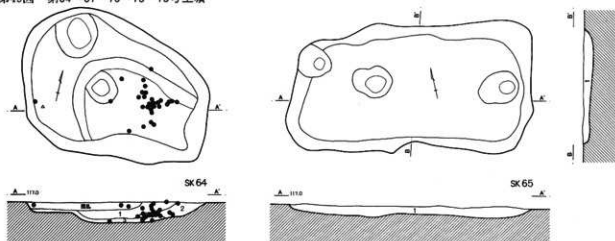
- 1 暗茶褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック多、茶褐色土少、堅緻

SK 62

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子、炭化物粒子少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、炭化物粒子数堅緻
- 3 黒褐色土：ローム粒子・ブロック、炭化物粒子少、堅緻
- 4 黄褐色土：ロームブロック多、堅緻

0 2m

第49図 第64～67・70～73・75号土坑



SK 64

- 1 茶褐色土：ローム粒子少、焼土粒子多、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子、焼土・炭化物粒子少、堅緻
- 3 黄褐色土：ロームブロック主体、茶褐色土少、やや粘性、緻密

SK 65

- 1 茶褐色土：暗黄褐色土ブロック多、焼土・炭化物粒子少、白色微粒子、堅緻

SK 66

- 1 暗茶褐色土：ローム・焼土粒子少、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 3 黄褐色土：ロームブロック多、堅緻

SK 67

- 1 暗茶褐色土：ローム粒子少、緻密
- 2 黒褐色土：ローム粒子・ブロック少、緻密
- 3 茶褐色土：ローム粒子・ブロック多、緻密
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック多
- 5 黄褐色土：ローム土

SK 70

- 1 暗褐色土：焼土粒子少、土器片
- 2 暗褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム粒子多、土器片
- 4 暗黄褐色土：第3層よりローム粒子多
- 5 暗褐色土：ローム粒子、やや粘性

SK 71

- 1 暗褐色土：ロームブロック多

SK 72

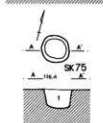
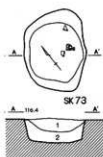
- 1 暗褐色土：炭化物微、ローム粒子多
- 2 黄褐色土：焼土粒子微、堅緻

SK 73

- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅緻（土器片出土）
- 2 黄褐色土：焼土粒子、炭化物少、やや粘性、堅緻

SK 75

- 1 暗褐色土：ローム粒子、黒色土粒子、堅緻



0 2m

傾斜しており、墳底は2段に掘り込まれ、さらにビット状の窪みが2箇所で見出された。

第56図5～10に示したとおり、条痕文系土器が主体的に出土しており、炉址は見出できないものの、早期後半の遺構と考えられる。

第66号土壌 (第49図)

H32区、第5号炉穴の東側に隣接する。平面の形状はやや歪んだ楕円形で、墳底は起伏があり、壁の立ち上がりも一定しない。一応C類に含めたい。

第59図23・24、第60図2・3の土器が出土した。

第67号土壌 (第49図)

H33区、第66号土壌から南へ約4mの距離に位置する。平面の形状は円形で、B類に該当する。

第59図25～28の土器が出土した。

第70号土壌 (第49図)

I34区、第67号土壌から南へ約13m離れて位置する。平面の形状は円形で、B類に該当する。

第59図29～31の土器が出土した。

第71号土壌 (第49図)

J34区に位置する。ビット状の小型の土壌であるが、一応A類としたい。J34・35、K34・35区では、A類あるいはB類に該当する第71・73、75、77、78、81号土壌の7基がまとめて発見された。

第61図2の土器が出土した。

第72号土壌 (第49図)

J34区、第71号土壌の南約4mに位置する。A類に該当する。

第61図4の土器が出土した。

第73号土壌 (第49図)

J34区、第72号土壌の東約3mに位置する。平面の形状は楕円形で、A類に該当する。

第61図5～9の土器が出土した。

第75号土壌 (第49図)

K34区、第73号土壌の東約3mに位置する。第71号土壌に類似した小型の土壌である。A類に該当する。

第61図3の土器が出土した。

第78号土壌 (第50図)

J34・35区、第72号土壌の南約2mに位置する。平面の形状が円形で、A類に該当する。

覆土下層から大型の礫が5点検出されるとともに、第60図5、6の器形復元可能な一括個体と、第61図10～18の土器が出土した。

第81号土壌 (第50図)

J35区、第78号土壌の南約3mに位置する。平面の形状は円形で、B類に該当する。

第61図19の土器が出土した。

第83、84号土壌 (第50図)

第83号土壌と第84号土壌は、B類に該当する。第83号土壌はK36区に、第84号土壌はK37区に位置し、南北方向に約10m離れている。おなじB類の第81号土壌は、第83号土壌の北約14mに位置する。

第96、97、98号土壌 (第50図)

調査区南側のJ47・48、K47・48区で、A類に該当する3基の土壌が、まとめて発見された。

第96号土壌から第56図11が出土している。

第102号土壌 (第51図)

調査区南側のF・G51区で、単独で発見された。A類に該当する。

拳大の礫とともに、第56図13、14の土器と打製石斧1点が出土した。

第103号土壌 (第51図)

J51区、第102号土壌から東へ約33m離れて位置する。A類に含めるが、遺構北側部で墳底が拡大して、開口部より広くなり、断面形が一部袋状である。

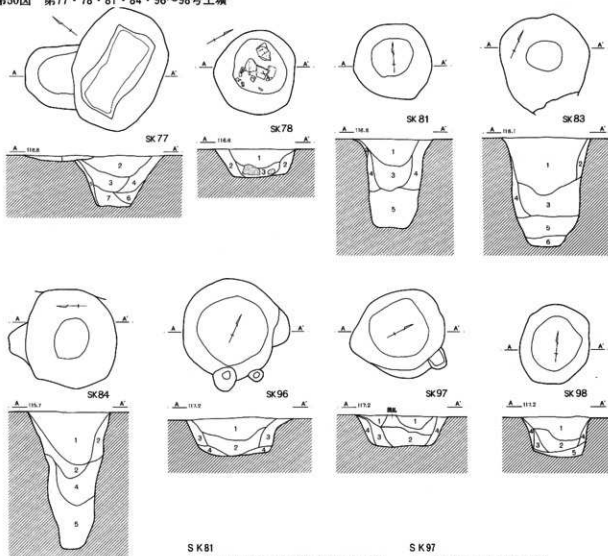
第56図15～25の土器がまとめて出土した。

第52～55図に示した土壌は、すべてE類に該当する。

第16号土壌のように、単独で発見されたものもあるが、第29、30、31号土壌の3基は、近接してつくられ、長軸線も北西から南東方向で一致する。

このような傾向は、第47、48、50号土壌や、第79、80号土壌にも認められる。

第50図 第77・78・81・84・96～98号土坑



SK 77

- 1 黒褐色土：ローム粒子
- 2 黒褐色土：ロームブロック、堅緻
- 3 黒褐色土：焼土粒子微、堅緻
- 4 暗黄褐色土：焼土粒子微、堅緻
- 5 黄褐色土：（壁の崩落？）やや粘性、堅緻

SK 78

- 1 黒褐色土：焼土粒子、炭化物、堅緻（土器、礫出土）
- 2 暗黄褐色土：炭化物、焼土粒子微、堅緻
- 3 暗褐色土：炭化物、焼土・ローム粒子微、堅緻

SK 81

- 1 暗褐色土：ローム粒子微、やや粘性、堅緻
- 2 ローム土：焼土粒子、暗褐色土微、やや粘性
- 3 暗褐色土：ロームブロック、やや粘性
- 4 暗黄褐色土：ローム粒子多
- 5 暗褐色土：堅緻

SK 83

- 1 暗褐色土：ローム粒子（土器片出土）
- 2 黄褐色土：（壁の崩落土？）暗褐色土粒子多
- 3 暗褐色土：ロームブロック多
- 4 黄褐色土：（壁の崩落土？）
- 5 暗褐色土：ローム粒子
- 6 暗黄褐色土：やや粘性、堅緻

SK 84

- 1 暗褐色土：ローム粒子
- 2 暗褐色土：ローム粒子・ブロック多
- 3 暗黄褐色土：（壁の崩落？）堅緻
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック多、堅緻
- 5 暗黄褐色土：ロームブロック多

SK 96

- 1 黒褐色土：ローム粒子多、焼土・炭化物粒子微、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子多、焼土・炭化物粒子少、堅緻
- 3 暗褐色土：ローム粒子・ブロック、堅緻
- 4 暗褐色土：ローム粒子・ブロック多、やや粘性、緻密

SK 97

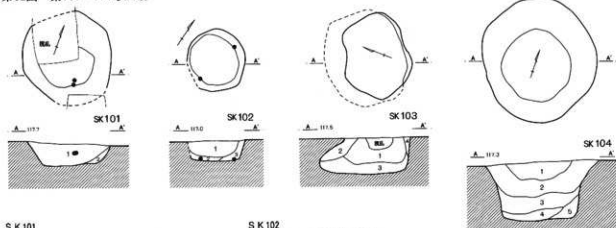
- 1 黒色土：ローム粒子多、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 3 暗褐色土：炭化物・ローム粒子、やや堅緻
- 4 黄褐色土：（壁の崩落？）ローム層

SK 98

- 1 黒褐色土：焼土・ローム粒子微、堅緻
- 2 黒褐色土：焼土・ローム粒子多、堅緻
- 3 黒褐色土：焼土・ローム粒子、堅緻
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック多、やや堅緻
- 5 黒色土：ローム・焼土ブロック、炭化物粒子、酸化的砂、堅緻（人為堆積？）

0 2m

第51図 第101～104号土壌



S K 101

- 1 暗褐色土：ローム・焼土粒子、炭化物、堅緻
2 暗黄褐色土：ローム土、暗褐色土、やや粘性、堅緻

S K 102

- 1 暗褐色土：礫削片多、堅緻
2 黒褐色土：（人為堆積？）ロームブロック
3 暗黄褐色土：焼土粒子多、堅緻

S K 103

- 1 暗褐色土：ローム・炭化物・焼土粒子多、堅緻
2 暗褐色土：第1層類似、ローム土
3 暗褐色土：第1層類似、ローム土多
4 黄褐色土：ローム土

S K 104

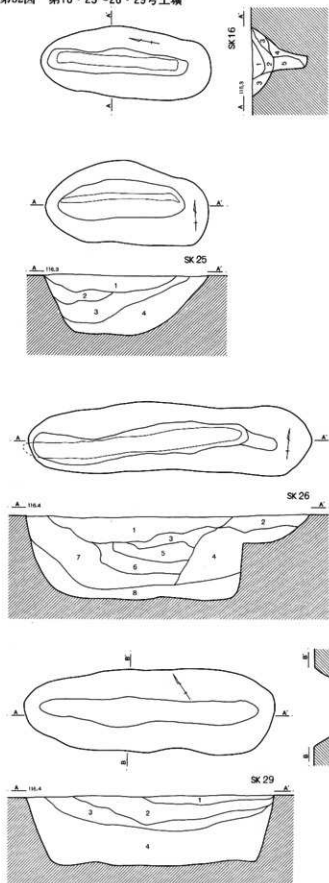
- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅緻
2 褐色土：ローム土多、やや粘性
3 黄褐色土：ローム土
4 褐色土：第2層類似
5 黄褐色土：ローム土



第5表 縄文時代土壌一覧表(1)

新番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備考	旧番号
1	N6	楕円形	1.68	0.85	0.50	N-9°-W		71
14	J17・18	円形	1.06	0.95	0.81	N-34°-W		80
15	K19	楕円形	1.72	1.15	0.21	N-12°-W		74
16	H20	楕円形	2.69	1.10	0.86	N-6°-W	落し穴	322
17	H・I20・21	楕円形	1.15	0.98	0.62	N-34°-W		256
18	I22	円形	1.54	1.37	0.43	N-27°-E		328
23	I24	楕円形	1.77	0.38	0.30	N-75°-W	落し穴	168
24	I24	楕円形	2.02	0.41	0.56	N-20°-W	落し穴	167
25	I24	楕円形	2.56	1.29	0.91	N-90°-E	落し穴	95
26	K・J24	楕円形	4.45	1.06	1.28	N-78°-E	落し穴	93
27	K24	楕円形	2.82	1.20	0.32	N-9°-W		87
29	I・J25	楕円形	4.01	1.27	1.09	N-56°-W	落し穴	96
30	I・J25	楕円形	3.74	1.56	0.91	N-53°-W	落し穴	97
31	I・J25	楕円形	3.71	1.30	1.39	N-68°-W	落し穴	98
32	K25・26	楕円形	1.90	0.86	0.70	N-16°-E	落し穴	164
33	J26	円形	1.45	1.36	1.25	N-12°-E		102
35	K27	楕円形	4.46	1.72	1.55	N-32°-W	落し穴	107
36	K・L27	楕円形	2.83	1.14	1.04	N-73°-W	落し穴	115
37	K・L27	楕円形	1.69	1.44	0.60	N-18°-E		165
38	J・K28	円形	1.50	1.31	0.20	N-55°-E		105
39	J28	楕円形	4.52	4.51	1.18	N-20°-W	落し穴	108
40	J・K28・29	円形	1.11	1.04	0.21	N-32°-E		111
41	K28	円形	0.96	0.83	0.22	N-59°-E		109
42	K29	円形	1.19	1.10	0.21	N-71°-W		112
43	k29・30	円形	1.75	1.70	0.16	N-65°-W		119
44	J28	円形	1.79	1.60	0.15	N-4°-E		116
45	L29	円形	1.10	0.88	0.13	N-21°-W		117
46	G30	楕円形	1.35	1.14	1.75	N-13°-E		161
47	G30	楕円形	3.46	0.85	1.17	N-32°-E	落し穴	162
48	G30	楕円形	(1.80)	(0.72)	1.17	N-28°-W	落し穴	160
49	G30	円形	1.54	1.46	1.93	N-62°-E		159
50	G31	楕円形	2.95	1.06	1.22	N-46°-W	落し穴	158

第52図 第16・23~26・29号土壌



SK 16

- 1 暗褐色土：ローム土、堅緻
- 2 明褐色土：第1層よりローム土多、堅緻
- 3 黄褐色土：ソフトローム
- 4 黄褐色土：ハードローム
- 5 暗褐色土：ローム土を含み、非常に堅緻

SK 25

- 1 茶褐色土：ローム粒子・ブロック多、堅緻
- 2 暗茶褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、やや粘性
- 3 暗黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土微、やや粘性
- 4 黄褐色土：ロームブロック主体、茶褐色土少、やや粘性、堅緻

SK 26

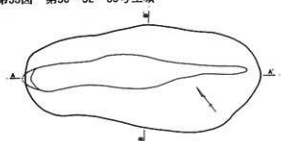
- 1 黒褐色土：ローム粒子少、白色微粒子、焼土粒子微、堅緻
- 2 淡黄褐色土：ローム粒子多、同ブロック、白色微粒子、堅緻
- 3 暗茶褐色土：ローム粒子多、焼土・白色微粒子微、やや粘性、堅緻
- 4 茶褐色土：ローム粒子・ブロック多、焼土・白色微粒子微、やや粘性、堅緻
- 5 黄褐色土：ロームブロック主体、茶褐色土多、やや粘性、堅緻
- 6 暗黒褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、堅緻
- 7 暗黄褐色土：ロームブロック主体、黒褐色土多、焼土粒子微
- 8 暗黄褐色土：ローム土主体、黒色土粒子多、粘性、堅緻

SK 29

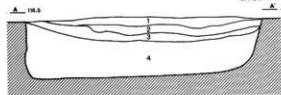
- 1 暗褐色土：ローム粒子、焼土粒子少、堅緻
- 2 暗茶褐色土：ローム粒子多、焼土粒子微、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム粒子・ブロック多、堅緻
- 4 黄褐色土：ロームブロック多、やや粘性、堅緻

0 2m

第53図 第30～32・35号土壇

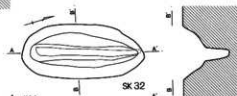


SK 30

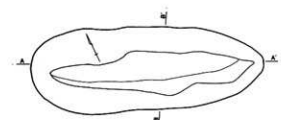


S K 30

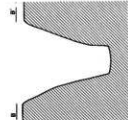
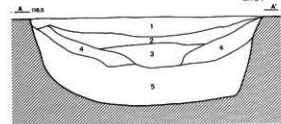
- 1 暗褐色土：ローム粒子少、堅緻
- 2 暗茶褐色土：ローム粒子・小ブロック、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム粒子・ブロック多、やや粘性
- 4 黄褐色土



SK 32

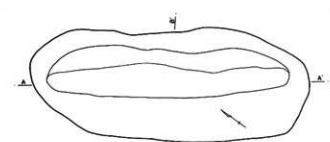


SK 31

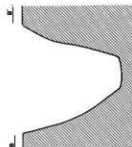
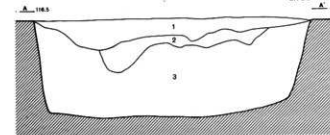


S K 31

- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅緻
- 2 茶褐色土：ローム粒子・ブロック、
焼土粒子、炭化物、堅緻
- 3 明褐色土：ローム粒子多、やや粘性
- 4 暗黄褐色土：ローム土多、やや粘性
- 5 黄褐色土：（ローム土）粘性、堅緻



SK 35

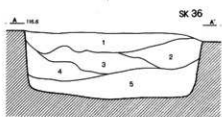
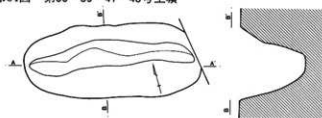


S K 35

- 1 黒褐色土：淡茶褐色土ブロック、白色微粒子多、ローム・焼土粒子微、堅緻
- 2 茶褐色土：ローム粒子多、
同ブロック少、焼土粒子・
白色微粒子微、やや粘性、堅緻
- 3 黄褐色土：ローム土主体、
茶褐色土微、粘性、堅緻

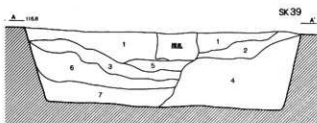
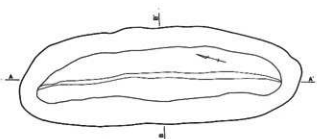
0 2m

第54図 第36・39・47・48号土坑



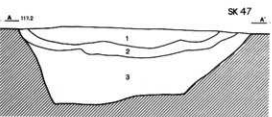
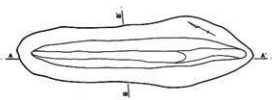
SK 36

- 1 黒褐色土：ローム粒子少、堅緻
- 2 暗茶褐色土：ローム粒子多、同ブロック少、やや粘性、堅緻
- 3 暗黄褐色土：ローム粒子・ブロック多、やや粘性、堅緻
- 4 茶褐色土：ローム土主体、暗黄褐色土多、やや粘性、堅緻
- 5 黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土少、やや粘性、堅緻



SK 39

- 1 暗茶褐色土：ロームブロック、焼土・白色微粒子少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子多、同ブロック、焼土粒子少、やや粘性、堅緻
- 3 暗黒褐色土：ローム粒子多、黒褐色土ブロック、焼土粒子微、やや粘性、堅緻
- 4 黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土少、粘性、堅緻
- 5 暗黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土多、焼土粒子少、粘性、堅緻
- 6 黒褐色土：ローム粒子少、茶褐色土ブロック多、堅緻
- 7 黄褐色土：ローム土主体、黒褐色土少、やや粘性、堅緻

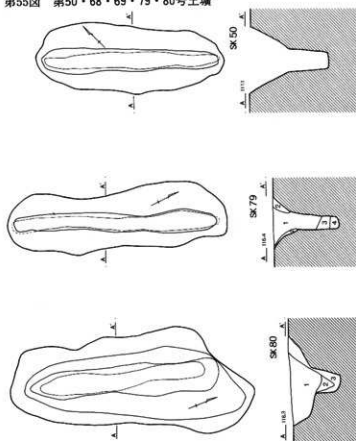


SK 47

- 1 黒褐色土：ローム粒子少、堅緻
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック多、焼土粒子少、やや粘性、堅緻
- 3 黄褐色土：ローム土主体、茶褐色土少、やや粘性、堅緻

0 2m

第55図 第50・68・69・79・80号土壌

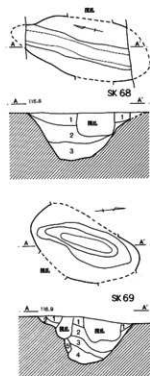


S K 79

- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅緻
- 2 黄褐色土：（壁の崩落？）堅緻
- 3 暗黄褐色土：焼土粒子微、堅緻
- 4 暗褐色土：黒色土多、堅緻

S K 80

- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅緻
- 2 黄褐色土：（壁の崩落？）堅緻
- 3 暗黄褐色土：焼土粒子微、堅緻



S K 68

- 1 暗褐色土：ローム土、堅緻
- 2 褐色土：ローム土主体、やや粘性
- 3 褐色土：ローム土主体、暗褐色土

S K 69

- 1 暗褐色土：ローム粒子、炭化物多、やや堅緻
- 2 赤褐色土：ローム粒子、炭化物粒子多、やや粘性、堅緻
- 3 褐色土：ローム粒子・ブロック
- 4 黄褐色土：ロームブロック主体、暗褐色土、やや粘性、堅緻
- 5 黄褐色土：ローム土

0 2m

第6表 縄文時代土壌一覧表(2)

新番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備考	旧番号
51	H30	楕円形	1.31	1.50	0.20	N-16°-W		154
52	I30	楕円形	1.12	1.04	0.20	N-21°-W		148
53	J・K30	楕円形	1.40	1.02	0.22	N-20°-W		120
54	K30・31	楕円形	1.86	1.64	0.16	N-22°-W		131
55	K31	楕円形	1.51	1.33	0.67	N-26°-W		134
56	K31	不定形	1.79	1.69	0.15	N-2°-W		118
57	K31	楕円形	1.68	1.55	0.65	N-60°-W		135
58	L31	円形	1.43	1.38	0.20	N-14°-E		136
59	I31	楕円形	1.24	1.10	0.28	N-35°-W		139
60	I31	楕円形	1.84	1.13	0.37	N-37°-W		138
61	I31	楕円形	1.06	1.06	0.17	N-25°-E		143
62	I31	楕円形	1.68	1.58	0.46	N-30°-E		142
63	G32	不定形	2.38	1.35	0.40	N-83°-E		156
64	H32	不定形	3.12	2.14	0.32	N-81°-E		152
65	H32	長方形	3.79	1.86	0.11	N-76°-W		144
66	H32	不定形	1.50	1.13	0.33	N-6°-W		145
67	H33	楕円形	1.60	1.49	1.92	N-46°-E		147
68	I33・34	楕円形	(2.24)	(0.82)	0.74	N-1°-W	落とし穴	342
69	H34	楕円形	1.80	(0.94)	0.69	N-26°-E	落とし穴	343
70	I34	楕円形	1.38	1.26	1.82	N-30°-W		205

第7表 縄文時代土器一覧表(3)

新番号	グリッド	平面形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備 考	旧番号
71	J34	不 定 形	0.62	0.60	0.33	N-79°-E		212
72	J34	円 形	1.16	1.15	0.30	N-25°-W		214
73	J34	長 方 形	1.25	0.98	0.35	N-45°-E		217
75	K34	円 形	0.45	0.42	0.30	N-82°-W		218
77	J35	長 方 形	1.91	1.41	0.80	N-77°-E		223
78	J34・35	円 形	1.34	1.29	0.44	N-20°-W		213
79	K35	楕 円 形	3.47	0.85	1.05	N-26°-E	落 し 穴	225
80	K35	楕 円 形	3.37	1.39	0.78	N-13°-E	落 し 穴	226
81	J35	円 形	1.22	1.15	1.40	N-90°-E		235
83	K36	不 定 形	1.39	1.32	1.70	N-45°-E		249
84	K37	円 形	1.50	1.47	2.15	N-70°-W		248
96	J47	円 形	1.54	1.53	0.58	N-7°-E		311
97	J48	不 定 形	1.44	1.06	0.46	N-15°-W		315
98	K47・48	楕 円 形	1.25	1.06	0.63	N-2°-E		312
101	I50	円 形	1.50	1.41	0.34	N-84°-W		304
102	F・G51	楕 円 形	0.96	0.86	0.31	N-72°-W		29
103	J51	不 定 形	1.38	0.90	0.56	N-64°-E		319
104	G53	円 形	1.83	1.78	0.92	N-58°-W		271

(4) 土壇出土の遺物 (第56～63図)

土器 (第56～61図)

第62、64号土壇出土土器は条痕文系土器で、後述するグリッド出土土器の第I群土器に該当する。

第62号土壇出土土器 (第56図1～4)

1～4は、深鉢形土器の胴部破片である。器内外面に条痕文や、擦痕文が認められる。

第64号土壇出土土器 (第56図5～10)

5・6は深鉢形土器の口縁部破片、7～9は胴部破片、10は尖底部の破片である。

5はやや先細りの口縁で、波状あるいは突起状の形態をとる。6は丸棒状に成形した口縁である。

第96号土壇出土土器 (第56図11)

口縁に近い部位の破片で、3条の結節浮線文が斜行する。前期終末の土器である。

第17、102、103号土壇出土土器は、五領ケ台式段階、第49から61号土壇出土土器は、勝坂、阿玉台式段階の土器で、後述する第III群土器に該当する。

第17号土壇出土土器 (第56図12)

12は、口縁部破片である。口縁は角頭状で、折返口縁となる、直線的に立ち上がる器形である。口縁直下

から、第1種結束羽状縄文を横位に施文する。複合口縁部の下端には、原体の結節が「S」字状に表れる。

第102号土壇出土土器 (第56図13・14)

13・14は、同一個体である。口縁は角頭状に成形され、平縁で、直線的に立ち上がる器形である。

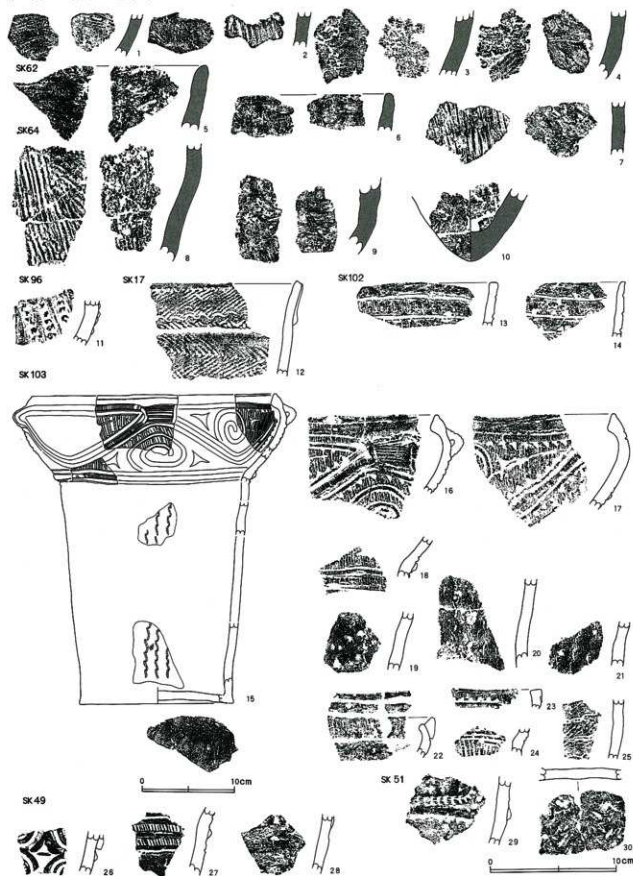
口縁に平行して沈線文を数段にわたって施し、沈線間を細い短沈線で刻むように埋めるか、あるいは沈線上に三角印刻文を上下交互にくわえている。

第103号土壇出土土器 (第56図15～25)

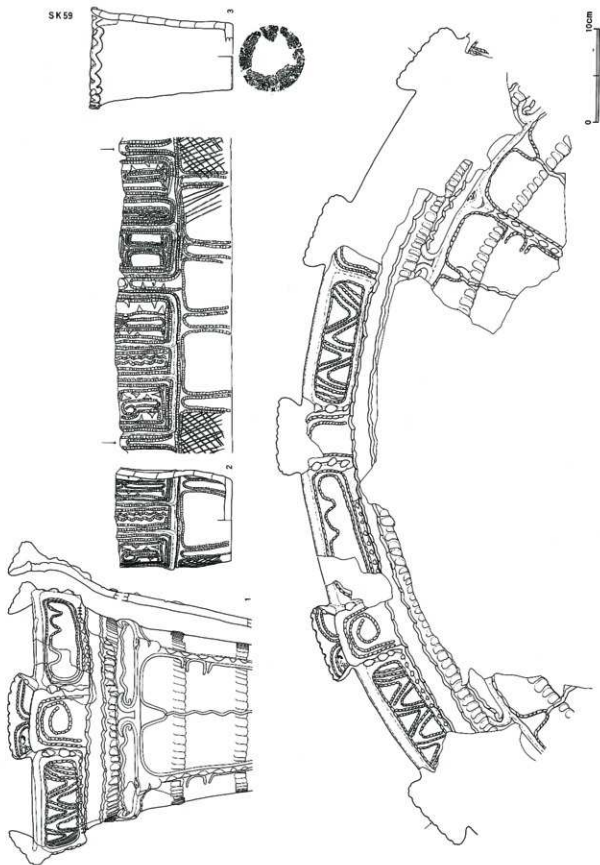
15～21は、同一個体で、推定復元した。口縁は肥厚するが、半載竹管の凹面を使った調整を行うことにより、先端は細く直立し、口縁を縁取るように沈線文が巡る。口縁部は内湾し、胴部は直線的に立ち上がって、底部が張り出し、やや上げ底の器形である。

口縁部文様帯は、隆起線文を貼り付け、その上に半載竹管の凹面を用いて押し引いた結節浮線文で、区画する。文様帯内には、同様の結節浮線文で、4単位の逆三角形をした区画文を作り出し、各区画文を橋状把手で接続する。区画内には、結節浮線文に沿って半載竹管による半隆起線文を施し、さらに半隆起線文による渦巻文と、三叉状印刻文で空間を埋めている。また半隆起線文や結節浮線文には、細かな三角印刻文が連続

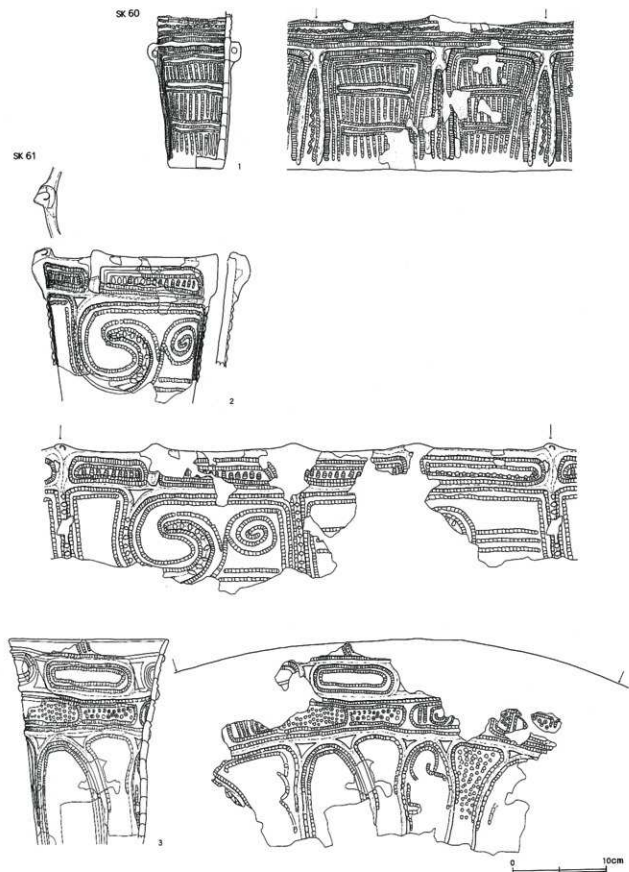
第56図 土壇出土土器(1)



第57図 土壇出土土器(2)



第58図 土壇出土土器(3)



して加えられる。地文には、縦方向の細条線文を施す。

22・23は、複合口縁となるもので、22は、口唇に沈線文が廻り、口縁の肥厚部に細条線文を施す。

23は、口縁の肥厚部に細条線文を施し、下端には三角印刻文を連続して刻む。

24・25は、胴部破片で、24は、平行沈線文による区画内に、集合沈線文を施文する。

25は、縄文の末端を繊維束で結び、横方向に施す。

第49号土壇出土土器 (第56図26・28)

26・27は勝坂式、28は阿玉台式の胴部破片である。

26は、隆帯による重層楕円区画内に、角押文を施す。

27は、断面三角形の隆帯に沿って、連続爪形文と角押文を上下に施文する。

28は、扁平な隆帯をひた状に貼り付ける。

第51号土壇出土土器 (第56図29・30)

29の勝坂式の胴部破片で、隆帯による楕円区画内に連続爪形文を施文する。

30は、底部破片で、網代底が残る。

第59号土壇出土土器 (第57図1～3)

1は、阿玉台Ib式土器で、口縁部から胴部まで、1/4が残存する。口径27.2cm、現存器高21.7cmである。器形は、胴部が直線的に外反し、頸部で開いて、口縁部が内湾して立ち上がるキャリバー形である。平縁で、4単位の扇状把手がつく。

口縁部文様帯は、把手直下の空間と、隆帯による4単位の方形区画文で構成する。複数条の角押文で鋸歯状や曲線的な文様を描出する。

頸部には、波状沈線文を2条平行して施文する。

胴部には、隆帯による細長の楕円区画文を簡略化した文様と、懸垂文を4単位に配し、その接続部は、棒状に突起化する。突起頂部に玉抱三叉文を印刻する。

角押文は、隆帯に沿って単独で用い、無地文の胴部には、扁平な隆帯を押圧して貼り付けた、ひた状の文様を3段にわたって施す。

2・3は、猪沢式段階の土器である。

2は、口縁部から胴部上半を欠損した円筒形の土器

で、現存する器高12.2cm、底径8.2cmである。胴部上半に2単位の縦位区画文を構成し、区画内をさらに3分割する。区画の内外には、角押文を直・曲線的に充填施文し、三角印刻文が部分的にくえられる。

胴部下半は、単独の角押文で、方形と楕円形の文様を交互に描出し、一部に斜行沈線で、格子目文を施す。

3は、円筒形の器形で、ほぼ完形個体である。寸法は、口径10.3cm、器高15.0cm、底径6.6cmの小型の土器である。

口縁に沿って、断面カマボコ形の隆帯を、小波状に貼り付ける。底部を穿孔する。

第60号土壇出土土器 (第58図1)

猪沢式段階の土器である。円筒形の器形で、口縁部を欠損する。現存器高は16.0cm、底径は5.6cmである。

口縁部直下には、角押文を複数条廻らす。

胴部上半は、横位の隆帯を廻らして、一對の橋状把手を貼り付け、その下から又状の隆帯が懸垂する。懸垂する隆帯は、胴部を縦位に分割する。区画内では、角押文を複数条施文して、3段の小区画を構成し、縦位に平行する角押文を充填施文する。

第61号土壇出土土器 (第58図2・3)

2・3は猪沢式段階の土器である。2は、円筒形の器形で、胴部下半から底部を欠損する。口径は19.1cm、現存器高は15.4cmである。

口縁部には、頂部が渦巻き状となる、橋状把手が退化したような一對の棒状把手がつき、把手から隆帯が胴部に懸垂する。把手間には口縁から棒状の突起が垂れ下がり、口縁部に4単位の楕円区画文帯を構成する。

楕円区画に沿って、2条単位の角押文が廻り、さらに空間を縦位の角押文で充填する。

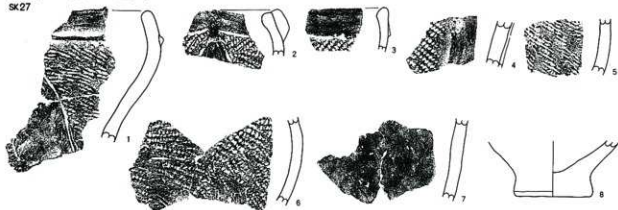
胴部は、突起の下から「Y」字状の隆帯が垂下し、先端は巻き上がる。角押文は2条単位を基調とし、隆帯に沿って、あるいは単独で直・曲線的な文様を描出する。

3は、円筒形の胴部から、さらに口縁部が開く器形で、口縁の一部と胴部が残存する。

口縁直下に幅狭の空間を設け、その下に楕円区画文

第59图 土壤出土土器(4)

SK27



SK33



SK37



SK 44



SX63



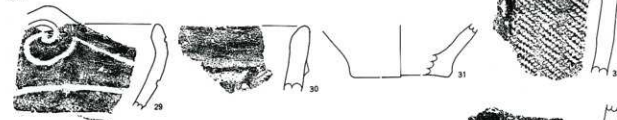
SK66



SK67



SK70



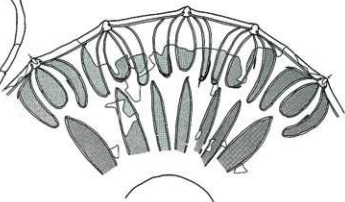
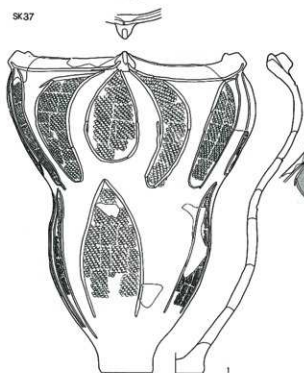
SK53



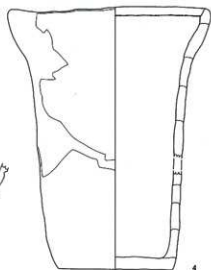
A horizontal number line is shown with a starting point labeled '0' on the left and an ending point labeled '10 cm' on the right. A single tick mark is placed exactly halfway between 0 and 10 cm, representing the midpoint.

第60図 土壇出土土器(5)

SK37



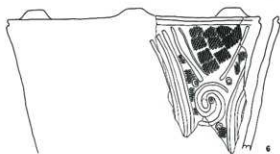
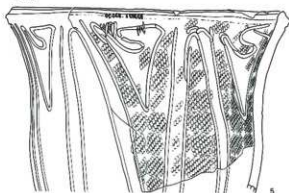
SK42



SK66



SK78



0 10cm

帯と、横帯区画が重層する。口縁直下の空間には部分的に縦位の角押文が施すが、基本的には、無文帯を形成するものと思われる。楕円区画内には、隆帯に沿って、2条単位の角押文が通る。横帯区画内には、角押文で楕円形の文様を描き、その内側を角押文や、刺突文で充填する。

胴部は、横帯を区画する隆帯から、「Y」字状の隆帯が曲線的に垂下する。また、垂下した隆帯による区画空間の一部には、刺突文を充填施文する。

第27号土壌以下、第98号土壌までの出土土器は、加曾利E式系、あるいは称名寺式段階に属し、後述する第IV群土器に該当する。

第27号土壌出土土器 (第59図1～8)

1～3は、深鉢形土器の口縁部破片である。1は、口縁部が内湾し、胴部で括れる器形をとるものと思われる。口縁に平行して隆起線文を施し、口縁の無文帯を区画する。沈線文で鋸歯状文を描出し、縄文Lを充填施文する。

2は、波状口縁の波頂部に小突起を貼り付け、口縁に平行する沈線文が無文帯を区画する。小突起の下端から沈線文が垂下し、鋸歯状文を描出する。縄文LRを充填施文する。

3は、潰れたような隆起線文が口縁の無文帯を区画する。隆起線文下には縄文LRを施文する。

4～7は、胴部破片である。4は、隆起線文が垂下し、区画内に縄文LRを施文する。

5は縄文Lを、6は縄文LRを施文し、7は無文で、器面を平滑に整形する。

8は、底部破片で、比較的小さな底から一端括れ、開いて立ち上がる器形である。

第33号土壌出土土器 (第59図9～11)

9、10は胴部破片、11は底部破片である。9は、細く浅い沈線文が曲線的に垂下し、区画内には縄文RLを充填施文する。

第37号土壌出土土器 (第59図12～16、第60図1)

12は、口縁部破片で、波状口縁となることも考えら

れる。口縁に平行する沈線文が無文帯を区画し、沈線文下には縄文LRを施文する。

13～16は、胴部破片である。13は胴部上半の破片、細い沈線文で鋸歯状文を描出し、縄文LRを充填施文する。

第60図1は、深鉢形土器のほぼ完形個体で、口径20.9cm、器高33.5cm、底径5.4cmである。器形は、小さめの底部から直立ぎみに胴部下半へ移行し、緩く張り出す、胴部中位で一旦括れてから開き、口縁部は内湾して立ち上がる。4単位の波状口縁で、丸棒状に成形した口縁は内傾するが、波頂部は肥厚し、直立する。波頂部には突起が貼り付き、突起間を結ぶ沈線文が、口縁の無文帯を区画する。

文様は、胴部括れ部を境に上下二段構成をとり、上段は、突起直下を起点に抱球文を描出する。抱球文は横位に連接せず、単位文化する。

下段の鋸歯状文は楕円形化する。尖った先端は、相対する抱球文とわずかなズレがあり、部分的に上下入り組み状に鋸歯状文を施す。縄文LRを充填施文する。

第44号土壌出土土器 (第59図17～19)

17は口縁部、18は胴括れ部、19は胴部の破片である。17は、沈線文による無文帯下に縄文RLを施文する。

第53号土壌出土土器 (第59図20～22)

20の胴部破片は、太い沈線文で渦巻文を描出し、縄文LRを充填施文する。

第56号土壌出土土器 (第59図23・24、第60図2・3)

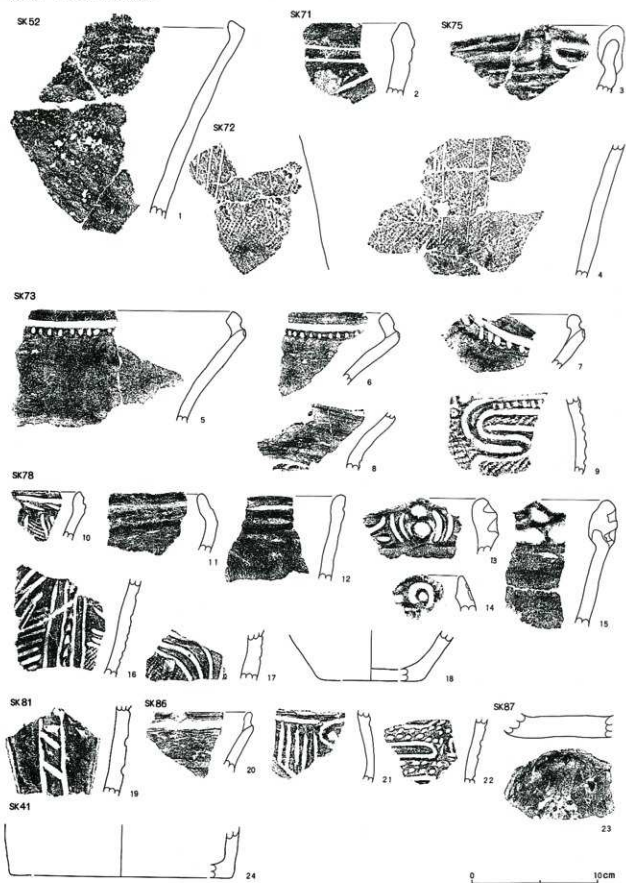
23は、胴下半の破片で、2条の太い沈線文が横走り、縄文LRを充填施文する。

24は、胴上半の破片で、横走る縄文帯から平行沈線文が垂下する。太い沈線文を用いており、充填する縄文はLRである。

第60図2は、比較的小型の深鉢形土器で、口縁部から胴部にかけての大型破片である。4単位の波状口縁で、直線的に外反する口縁部から、緩く括れ、胴部下半の張る器形である。口縁は角頭状で、波頂部口唇には、円形の刺突が施され、突起状の痕跡が残る。

文様は、上下二段に「J」字状文を構成したものの

第61図 土墳出土土器(6)



変形で、太く深い沈線を描出する。下段の「J」字状文が口縁直下の区画沈線に接続し、下位の区画沈線は、本来平行する2条の沈線によって行なわれるものか省略され、連弧状に文様間に入入する。このため、主文様は単位文化する。

図示した展開図は、主文様を左右対称の位置に配した想定復元をした。縄文Lを充填施文する。

3は、深鉢形土器の胴下半から底部の大型破片である。底部を穿孔する。

第67号土壌出土土器（第59図25～28）

25～28は、胴部破片である。25は、太い沈線で円環状の文様を描出し、縄文Lを充填施文する。内側の沈線文は押し引いて結節化する。

第70号土壌出土土器（第59図29～31）

29・30は、口縁部破片で、31は底部破片である。29は、波状口縁で、内湾して開く器形である。口縁内側には稜をもち、口唇は丸棒状に先細りする。

波頂下には、口縁区画線から「J」字状文が垂下する。縄文は施していない。

第98号土壌出土土器（第59図32）

32の胴部破片には、隆起線文が垂下する。

第42号土壌以下、これから述べる各土壌出土土器は、堀之内式に属し、後述する第V群に該当する。

第42号土壌出土土器（第60図4）

無文の深鉢形土器で、口径20.5cm、器高27.6cm、底径11.8cmである。円筒形の胴部から、口縁部はやや内湾して開く器形である。内削ぎしたような口縁の内側には、明瞭な稜が残る。堀之内式に含まれよう。

第52号土壌出土土器（第61図1）

深鉢形土器の口縁部破片で、無文の頸部は強く外反し、口縁は屈曲する。

第53号土壌出土土器（第59図33～36）

33は深鉢形土器の口縁部、34～36は胴部の破片である。33は、口縁直下に沈線文が廻り、その下に連続刺突文を施す。

第71号土壌出土土器（第61図2）

深鉢形土器の口縁部破片で、口縁下に平行沈線文が横走、あるいは斜行する。

第72号土壌出土土器（第61図4）

胴部破片で、3条単位の平行沈線文が懸垂する。

第73号土壌出土土器（第61図5～9）

5～7は口縁部、8は頸部、9は胴部の破片である。5・6は平縁、7は波状縁となる。口縁直下に沈線文が廻り、その下には連続刺突文を施す。9は縄文L Rの地文に、平行沈線文で、曲線的な文様を描出する。

第75号土壌出土土器（第61図3）

弱い波状縁となる口縁部破片である。

第78号土壌出土土器（第60図5・6、第61図10～18）

第60図5は、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大型破片である。平縁で、外反する口縁部が緩く括れ、胴部の張る器形である。

口縁直下には沈線文が廻り、体部全体に文様が展開する。6単位の平行沈線文が垂下し、さらに平行沈線文が斜行して接続する。各懸垂文間の空間には、わらび手文の変形したものか、三角形の沈線文を施文する。地文は縄文L Rである。

6は、3単位の突起をもつ深鉢形土器の口縁部破片で、器形は直線的に外反する。突起部を起点に3条単位の平行沈線文が曲線的に垂下し、懸垂文間には渦巻き状の文様を配する。地文は縄文L Rであるが、沈線文の間は擦り消している。

第61図10～15は、深鉢形土器の口縁部破片で、10は口縁直下から文様を描出する土器、11～15は、頸部に無文帯をもつ土器である。13～15は、口縁の屈曲部を沈線文と刺突文で装飾する。16・17の胴部破片では、平行沈線文間の縄文を擦り消している。

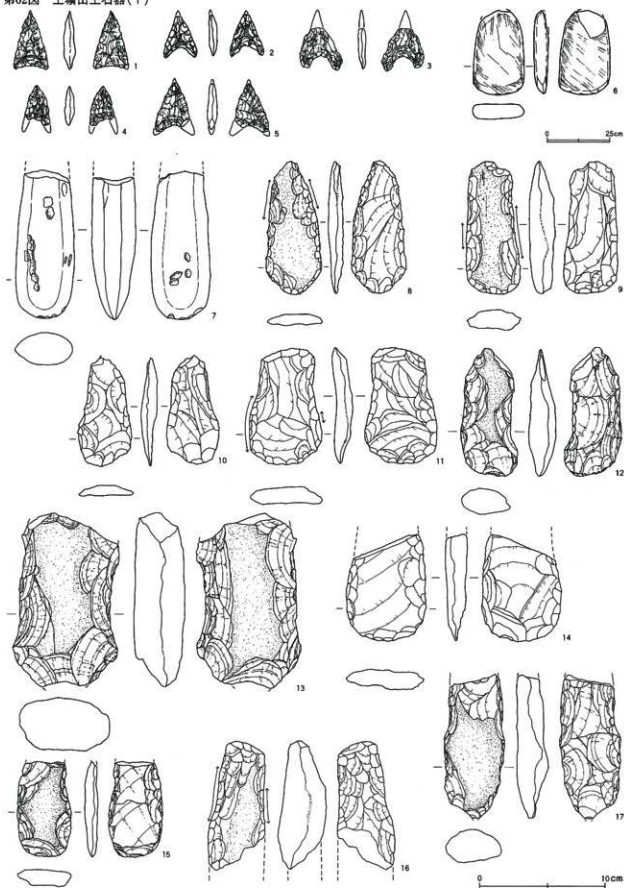
第81号土壌出土土器（第61図19）

19の胴部破片は無地文で、懸垂する平行沈線文間を短沈線で刺んでいる。

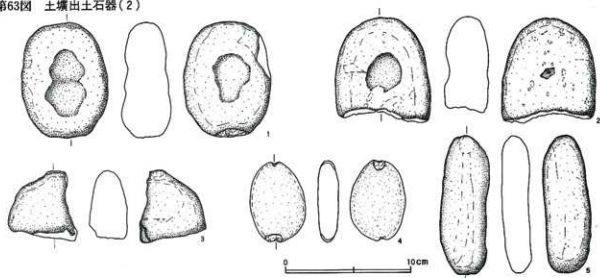
第86号土壌出土土器（第61図20～22）

20は口縁部、21・22は胴部の破片で、主文様が残した空間を21は集合沈線文で、22は刺突文で埋めている。

第62図 土壙出土石器(1)



第63図 土壌出土石器(2)



第8表 土壌出土石器観察表

番 号	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	出土地点	備 考
62図—1	石 鏃	(2.25)	1.39	0.44	(1.12)	チャート	SK35	
—2	石 鏃	(1.66)	1.36	0.28	(0.47)	黒曜石	SK73	
—3	石 鏃	(1.59)	1.72	(0.31)	(0.7)	黒曜石	SK84	
—4	石 鏃	(1.52)	(1.01)	(0.33)	(0.38)	黒曜石	SK102	
—5	石 鏃	(1.95)	(1.40)	0.37	(0.87)	チャート	SK103	
—6	磨製石斧	(3.29)	2.01	0.5	(5.93)	蛇紋岩	SK101	
—7	磨製石斧	(11.77)	4.69	3.54	(320.0)	砂岩	SK54	
—8	打製石斧	10.53	4.4	1.28	65.0	砂岩	SK43	
—9	打製石斧	10.55	4.25	2.05	120.0	砂岩	SK54	
—10	打製石斧	8.55	4.24	1.26	45.0	砂岩	SK84	
—11	打製石斧	9.25	5.89	1.46	105.0	砂岩	SK53	
—12	打製石斧	10.46	4.35	1.94	93.0	砂岩	SK72	
—13	打製石斧	(13.58)	8.18	3.87	(588.0)	砂岩	SK54	
—14	打製石斧	(8.12)	6.21	(1.65)	(125.0)	ホルンフェルス	SK64	
—15	打製石斧	(7.70)	4.24	1.08	(49.7)	砂岩	SK70	
—16	打製石斧	(10.23)	(4.35)	3.37	(167.0)	砂岩	SK53	
—17	打製石斧	(11.54)	4.93	2.3	(150.5)	砂岩	SK48	
63図—1	磨・凹石	8.86	6.73	3.8	(355.0)	閃緑岩	SK71	
—2	磨・凹石	(8.27)	7.46	3.18	(337.0)	閃緑岩	SK55	
—3	磨 石	(5.58)	(4.99)	(2.87)	(105.0)	閃緑岩	SK63	
—4	石 鏃	6.4	4.47	1.57	60.0	砂岩	SK67	
—5	敲 石	10.82	3.47	2.27	137.0	砂岩	SK103	

第87号土壌出土土器 (第61図23)

23は、比較的大型の底部破片である。

石器 (第62、63図)

各土壌からは、石鏃、磨製石斧、打製石斧、磨石・凹石、石鏃などが出土した。詳細は、石器観察表 (第8表) に示す。

(5) グリッド出土の遺物

土 器

坂東山遺跡からは、縄文時代早期後半から、前期、中期、後期前半の遺物が出土しており、この中では後期前半の土器が比較的まとまっている。以下、第Ⅰ～Ⅷ群土器に分けて説明する。

第Ⅰ群土器 (第64図1～17)

早期後半の条線文系土器を一括する。さらに有文土器と無文土器に分ける。

第Ⅰ類 (第64図1～6)

口縁部に文様帯を構成し、細隆起線文や沈線文で文様を描出する。野島式土器である。

a種 (1～5) 2条の平行する細隆起線文により、幾何学的な文様を描出し、さらに区画した空間を集合沈線文で充填する。第3、7号炉穴出土土器(第27図20・22、第32図5～9)なども本類に含まれる。また、第3、10号炉穴出土土器(第27図19・21・23、第35図2)は、細隆起線文を充填施文する。

b種 (6) 太い沈線文で文様を描出し、空間に集合沈線文を充填する。第7号炉穴出土土器(第32図11・12)は、隆起線文が横走り、文様帯を区画する。

第Ⅱ類 (第64図7～17)

第1、7号炉穴出土土器(第29図1、第32図4)などに代表される無文土器で、器内外面に、条痕文や、擦痕文を施す。14・16・17は、尖底部の破片である。

第Ⅲ群土器 (第64図18～48)

後期後半の土器を一括する。第Ⅰ・Ⅱ類は、諸磯a、b式に、第3～8類は、諸磯c式から前期終末の土器に比定される。

第Ⅰ類 (18・19)

平行沈線間に連続爪形文を施す。胎土に纖維は含まない。

第Ⅱ類 (20)

地文は縄文LRで、半載竹管による平行沈線文が横走る。

第Ⅲ類 (21～48)

櫛歯状工具による条線文を地文とし、各種の貼付文

を施した土器である。

a種 (21) 口縁から複数条の結節浮線文が斜めに垂下する。

b種 (22・23) 22は口唇上から耳たぶ状の貼付文を施す。23は口縁直下に円形の小突起を貼り付ける。

c種 (24～26) 断面三角形をした小型の貼付文を器面に点々と施し、貼付文には半載竹管の先端で刺突を加える。

d種 (28～34) 貼付文を加えない条線文だけの土器である。縦走や斜行するものの他に、鋸歯状 (29)、あるいは弧線状 (33・34) に施すものもある。

第Ⅳ類 (27)

複数条の結節浮線文を、平行して密に施文する。

第Ⅴ類 (35～44)

a種 (35～39) 半載竹管による平行沈線文で区画を構成し、さらに区画内を平行沈線文で充填する。

b種 (38・39) a種に三角印刻文を施す。

第Ⅵ類 (40～44)

斜行する集合沈線文に、交差する沈線文を施し、格子目文を描出する。43は三角印刻文を加える。

第Ⅶ類 (45～47)

結束羽状縄文を施す土器で、45の口縁部破片は、口縁直下に幅狭の無文帯をおく。

第Ⅷ類 (48)

無文土器で、擦痕状の整形痕が残る。

第Ⅸ群土器 (第65図1～28)

中期前半の土器を一括する。第Ⅰ類は五領ケ台式、第Ⅱ類は勝坂式、第Ⅲ類は阿玉台式に比定される。

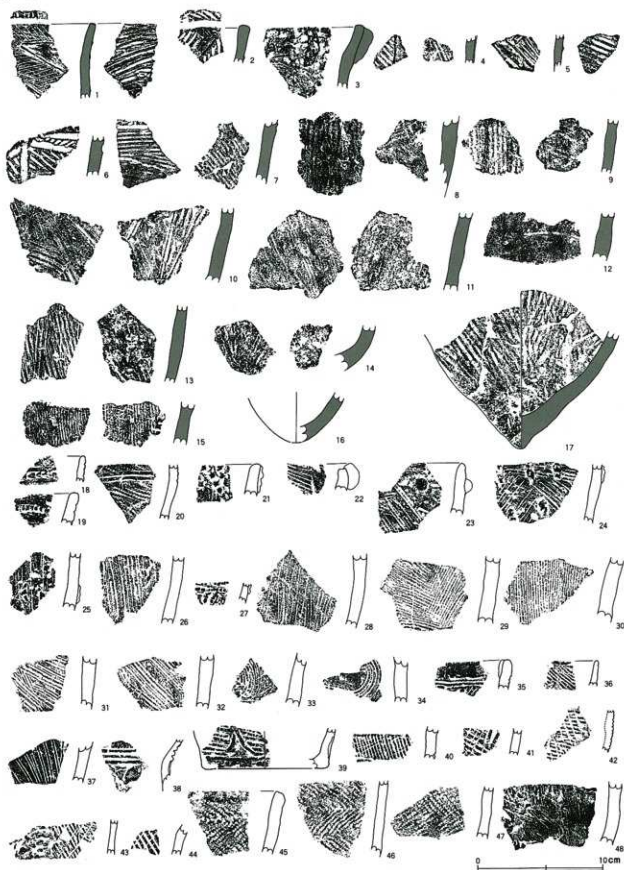
第Ⅰ類 (1)

半載竹管による平行沈線文に沿って、連続刺突文を施文する。第102号土壇から五領ケ台Ⅰ式に比定される土器がまとまって出土した。

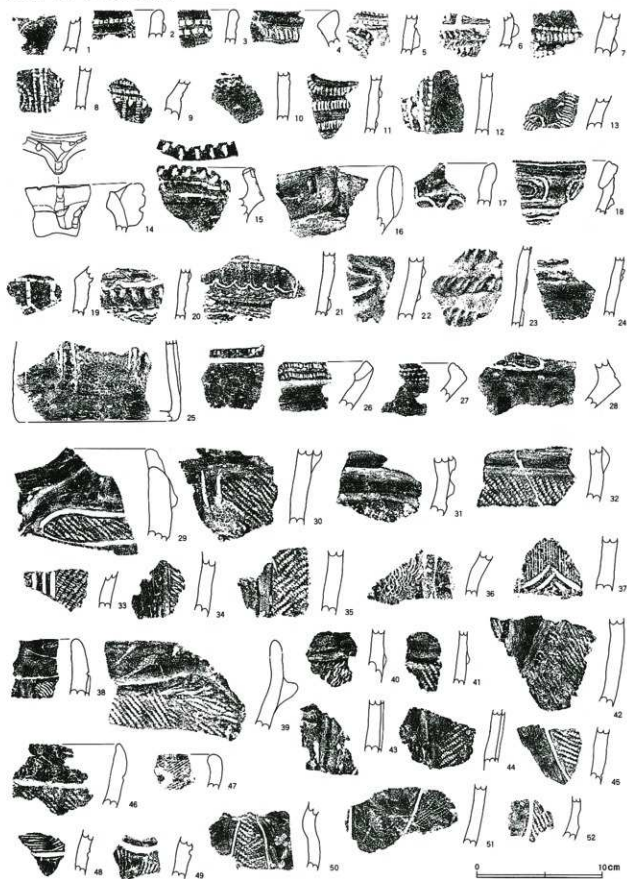
第Ⅱ類 (2～13)

隆帯が、楕円形や横帯の区画を構成し、区画に沿って複数条の角押文、爪形文を施文する。第59～61号土壇から絡沢式段階の良好な資料が出土した。

第64図 グリッド出土土器(1)



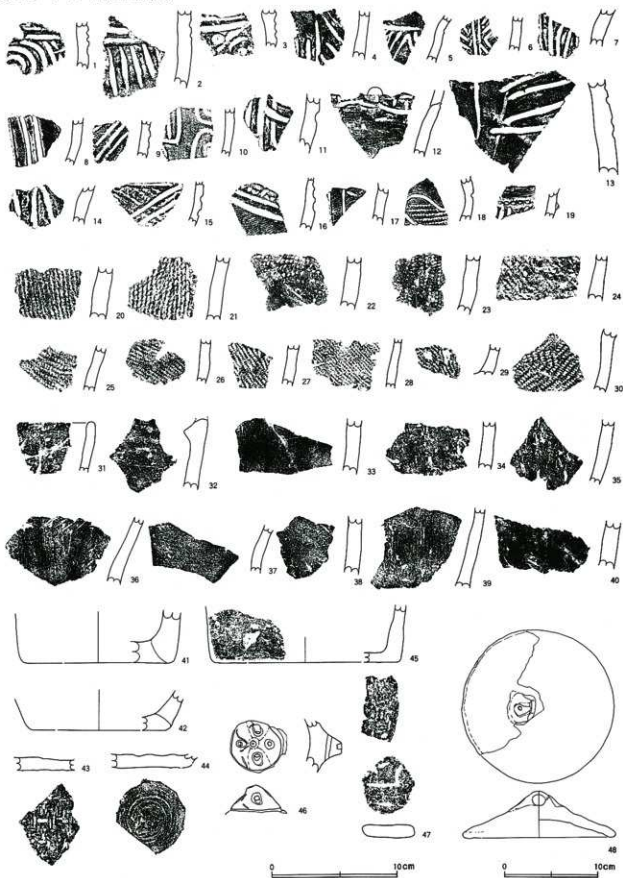
第65図 グリッド出土土器(2)



第66図 グリッド出土土器(3)



第67図 グリッド出土土器(4)



第3類 (14~24)

第59号土壇出土の阿玉台Ib式土器にみられるように、隆帯による楕円形や方形区画文で口縁部文様帯を構成し、平縁で、扇状把手や山形突起のつくものが多くを占める。胴部にはヒダ状の扁平な隆帯が数段にわたって廻り、懸垂文や横帯区画文を配して、角押文で加飾する。

第4類 (25)

第3類の底部に近い部位の破片である。

第5類 (26~28)

浅鉢形土器の口縁部及びそれに近い部位の破片である。肥厚した口縁の内側や、屈曲部に角押文を複数条施文する。

第IV群土器 (第65図29~52、第66図1~7)

中期後半から後期初頭の土器を一括する。第1類は加曾利EⅡ~Ⅲ式、第2類は中期終末から後期初頭の加曾利E式系土器、第3類は称名寺式に、およそ比定される。第4類は把手類を一括する。

第1類 (29~37)

29は、波状縁下に、隆帯と沈線文による楕円形区画文を施文する。30~32は、口縁部を区画する隆帯が施され、30は、隆帯下端から磨消懸垂文が下がる。

33~36の胴部破片には、磨消懸垂文を施文する。37は連弧文土器である。

第2類 (38~52)

a種 (38) 横走する沈線文が口縁の無文帯を区画し、隆起線文が垂下する。充填施文する縄文は隆起線文上にまで及ぶ。

b種 (39~44) 隆起線文により文様を描出する。39は口縁無文帯を区画する隆起線がエラ状に突出する。縄文は隆起線文上下半にまで及ぶ。40~41は隆起線文が横走し、42~44は懸垂する。縄文を充填施文する。

c種 (45~52) 沈線文により文様を描出する。46は沈線文が口縁無文帯を区画する。45・50~52の胴部には細い沈線文が鋸歯状文を描出し、縄文を充填施文する。第37号土壇出土土器 (第60図1) は、本種に該当する。

第3類 (第66図1~8)

a種 (1~4) 太い沈線文で直・曲線的な文様を描出し、縄文を充填施文する。3・4は、沈線文が平行して垂下し、区画文帯を作出する。第66号土壇出土土器 (第60図2) も本種に相当しよう。

b種 (5~8) a種と同様の沈線文で文様を描出するが、縄文は施文しない。5は波状縁の土器で、口縁直下に区画文帯が廻る。6は沈線文が縦型に垂下し、刺突文を施す。8は区画文帯が横走する。

第4類 (第66図9・10)

6は両耳壺につく橋状把手で、先端が突起する。7は深鉢形土器に単体でつく橋状把手で、縁に刻目文を施す。

第V群土器 (第66図11~46、第67図1~19)

後期前半の堀之内式に比定される。

第1類 (12~31)

深鉢形土器の口縁部破片を一括する。口縁が強く外反するか、直線的に立ち上がる器形が考えられる。

a種 (12~17) 小波状縁の土器で、波頂下の幅狭の口縁部に、沈線文と刺突文を用い装飾的な文様を施す。14は外面は無文で、内面の肥厚部に刺突文を施す。

b種 (18~22) 平縁で、口縁直下に沈線文が廻り、その下に、連続刺突文を加える。基本的に頸部は無文帯となるのが、22は縄文を施文する。

c種 (23~28) 口縁直下に沈線文が廻り、頸部は無文帯となる。

d種 (29~31) 口縁直下に沈線文が廻り、その下には、沈線文で直・曲線的な文様を描出する。

第2類 (第66図32~46、第67図1~19)

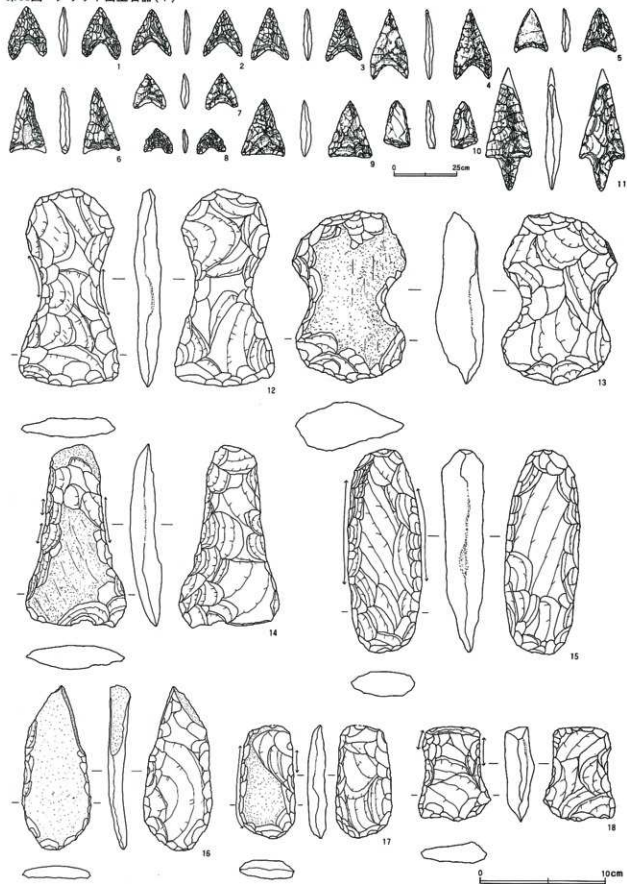
深鉢形土器の胴部破片を一括する。器形は直線的に開くものと、内傾するものがある。

a種 (32~46) 無地文の器面に、平行沈線文が垂下、あるいは斜行する。38から44は沈線文が蛇行し、45・46は曲線的な文様を描出する。

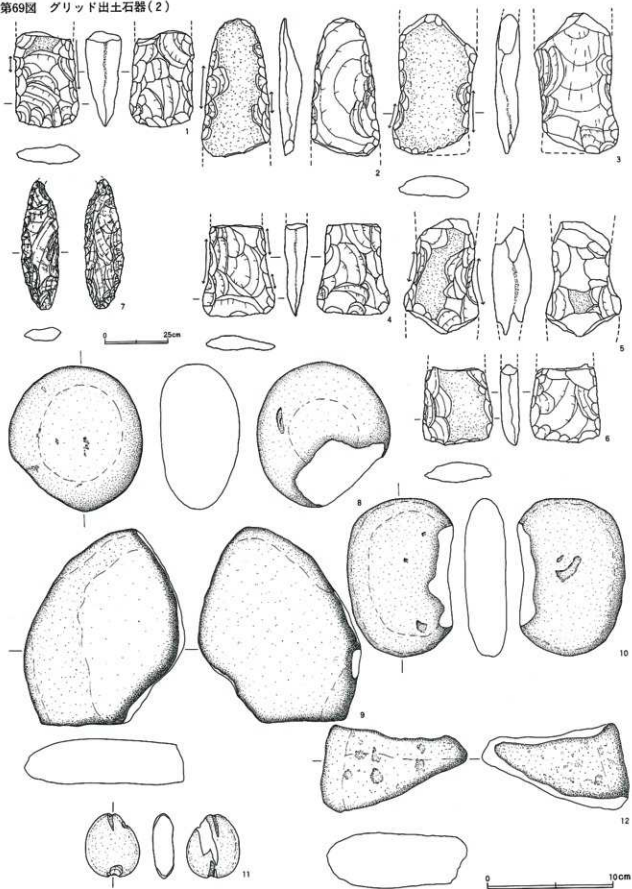
b種 (1~13) 沈線間の密な多条化した平行沈線文で文様を描出する。無地文の土器である。

c種 (14~18) 地文には縄文を施し、平行沈線文

第68図 グリッド出土石器(1)



第69図 グリッド出土石器(2)



が斜行、垂下して文様を描出する。18は楕円区画内に縄文LRを充填施文する。

d種 (19) 精製された土器で、刺突を施した隆起線文が横走して、頸部の無文帯を区画する。

第3類 (第66図11)

厚みのある板状の個体で、頂部が分かれ、端部は円盤状になる。把手の一部と思われる。

第VI群土器 (第67図20～30)

中期から後期の縄文のみの破片を一括する。深鉢形土器の胴部破片である。

第VII群土器 (第67図31～41)

中期から後期の無文土器を一括する。31は深鉢形土器の口縁部破片で、他は胴部破片である。

第VIII群土器 (第67図41～45)

底部破片を一括する。43・45は網代底、44は渦巻状

の文様が残る。

土製品 (第67図46～48)

48は蓋の破片で、1/3が残存する。推定径16cm、天井の高い湾曲した器形で、把手は櫛状につくられ、盲孔が穿たれている。無文である。

46は蓋の把手部の破片である。山形の形状で、周囲に沈線文が廻り、先端と四方に刺突が加えられ、一対は貫通する。47は円盤状の土製品である。

石器 (第68、69図)

表採した石器には石鏃、打製石斧、磨石・凹石、石鏃などがある。詳細は観察表 (第9表) に示す。

また第68図8の石鏃は、調査区北側のJ21区から、黒曜石の細屑片とともに検出した。出土層位は、ローム層との漸位層で、石器製作址の可能性も考慮される。

第9表 グリッド出土石器観察表

番 号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	出土地点	備 考
68図-1	石 鏃	2.03	1.52	0.32	0.7	黒曜石	J32区	
-2	石 鏃	1.84	1.54	0.21	0.4	黒曜石		
-3	石 鏃	2.06	1.43	0.3	0.53	黒曜石		
-4	石 鏃	(2.59)	1.55	0.34	(0.94)	チャート		
-5	石 鏃	1.67	1.36	0.24	0.48	チャート		
-6	石 鏃	(2.36)	(1.44)	0.34	(0.98)	チャート		
-7	石 鏃	1.38	1.29	0.26	0.4	チャート		
-8	石 鏃	0.96	1.13	0.21	0.2	黒曜石		
-9	石 鏃	2.23	1.75	0.42	1.31	チャート		
-10	石 鏃	1.84	1.07	0.35	0.76	チャート		
-11	石 鏃	(4.23)	1.83	0.58	(3.04)	安山岩	J21区	
-12	打製石斧	15.4	7.96	2.01	250.0	砂岩	J41区	
-13	打製石斧	13.27	8.86	3.47	440.0	砂岩		
-14	打製石斧	14.18	7.82	1.98	200.0	ホルンフェルス		
-15	打製石斧	16.0	5.88	3.42	495.0	緑泥片岩		
-16	打製石斧	13.0	5.17	1.25	110.0	ホルンフェルス		
-17	打製石斧	8.9	4.54	1.5	88.0	砂岩		
-18	打製石斧	7.48	5.69	2.26	105.0	ホルンフェルス		
69図-1	打製石斧	(7.59)	4.88	2.78	(131.0)	砂岩	J10区	
-2	打製石斧	(11.4)	5.41	1.73	(115.0)	砂岩	H30区	
-3	打製石斧	(11.2)	5.97	1.84	(177.0)	砂岩	H17区 J41区 区21区 E53区	
-4	打製石斧	(7.25)	5.61	1.84	(100.0)	ホルンフェルス		
-5	打製石斧	(9.06)	5.98	3.21	(206.0)	砂岩		
-6	打製石斧	(5.98)	5.59	1.53	(77.0)	ホルンフェルス		
-7	石 ヒ	(5.15)	1.45	0.42	(4.74)	チャート		
-8	磨 石	11.3	10.59	5.99	(945.0)	閃緑岩		
-9	磨 石	15.33	11.42	3.6	(1220.0)	砂岩		
-10	磨 石	12.27	(7.9)	3.21	(467.0)	閃緑岩		
-11	石 鏃	5.11	4.37	1.43	(42.0)	砂岩	E53区	
-12	磨 石	(6.45)	(11.36)	4.48	(412.0)	安山岩		

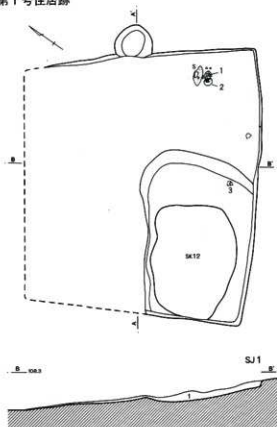
4 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、調査区北端の秋津川の低地を臨む北斜面と、斜面を南へ登った丘陵肩部から平坦部にかけての地点で発見されている。また調査区中央の平坦部では、とくに遺構、遺物は検出されていない。

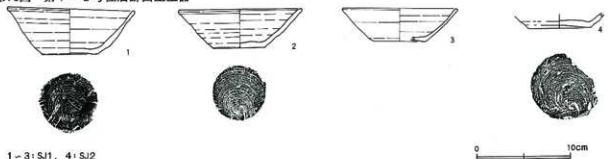
そして、調査区中央部と南側部を分ける小支谷に沿った、中央部南側の緩斜面でも遺構が発見された。

言い換えれば、調査区中央の平坦部を空白地帯として、それを取りまく丘陵肩部から斜面部に、遺構は分布している。従って、平安時代の集落は、丘陵の伸びる東側に、さらに広がるものと思われる。

第70図 第1号住居跡



第71図 第1・2号住居跡出土土器



1・3: SJ1, 4: SJ2

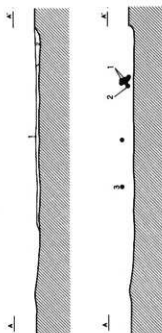
発見された遺構は、竪穴住居跡9軒と土壇9基である。以下、各遺構と遺物について述べる。

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第70、71図1～3)

調査区北側の丘陵斜面部、G14区に位置しており、調査区内の最も北側で発見された住居跡である。

斜面に立地するため、住居跡の北と西側壁の一部は検出できなかった。また、中世の第12号土壇と住居南西隅で重複する。



SJ1

1 暗褐色土

2 暗褐色土：焼土多

平面の形状は方形で、規模は、長径4.29m、推定短径3.61m、深さ10cmである。主軸方位はN-55°Eを指している。

カマドは、東壁の中央部につくられていたと推定されるが、検出できたのは、掘り方の痕跡だけである。

床面は、北側に緩く傾斜する。壁溝と柱穴は、確認

できなかった。

第71図1、2は住居跡の北東隅から、3は南壁ぎわから出土した。環底部の調整は、糸きり後未調整で、1、2は口径に対する底径が、1/2未満である。また、2は色調が橙色であるが、胎土、成形は須恵器のものである。

第10表 第1・2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
71図-1	環	13.7	5.1	6.0	WG	A	灰	75	回転糸切り未調整
-2	環	13.3	4.1	5.6	WG	B	橙	100	回転糸切り未調整
-3	環		(3.5)	6.8	WBG	A	灰	80	回転糸切り未調整
-4	環			6.6	WG	A	灰	30	回転糸切り未調整

第2号住居跡 (第72・71図4)

調査区北側の丘陵斜面部にあたるG14・15区、第1号住から南へ約5m離れて位置する。

住居跡の南と西側壁の一部は、擾乱のため検出できなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長径4.27m、推定短径3.95m、深さは10cmである。主軸方位はN-48°E

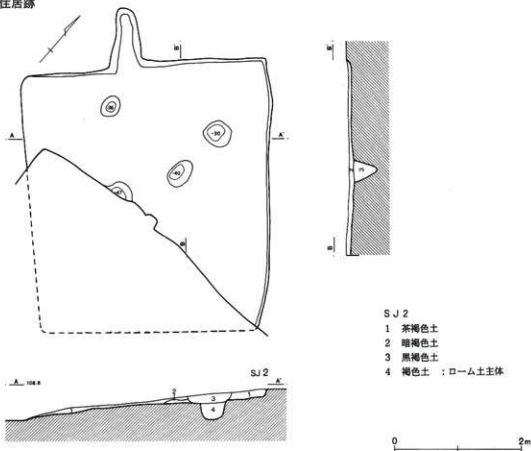
を指している。

カマドは、北壁の中央部につくられていたと推定されるが、検出できたのは、掘り方の痕跡だけである。

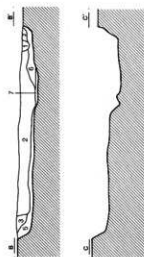
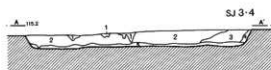
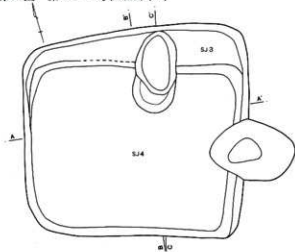
床面は、西側に緩く傾斜する。壁溝と柱穴は、確認できなかった。

第71図4の須恵器環を図示する。

第72図 第2号住居跡



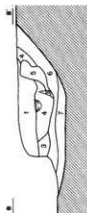
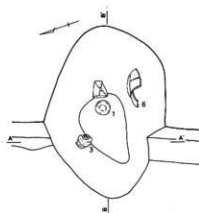
第73図 第3・4号住居跡(1)



SJ3・4

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土：焼土・炭化物多
- 4 褐色土：ローム土主体
- 5 褐色土：ローム土主体
- 6 暗褐色土：焼土主体
- 7 黄褐色土：ローム土主体

0 2m

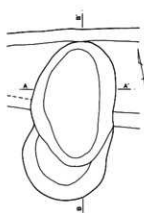


SJ3カマド



SJ3カマド

- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土：(カマド天井部) ローム土主体
- 3 暗褐色土：焼土多
- 4 暗褐色土：第3層より焼土多
- 5 暗褐色土：第4層より焼土多
- 6 黒灰色土
- 7 褐色土：ローム土主体
- 8 暗黄褐色土：(カマド袖部)



SJ4カマド

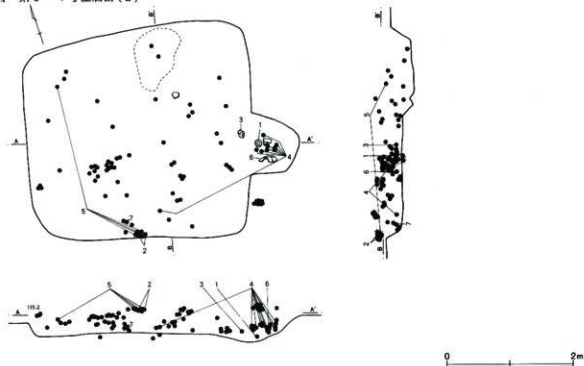


SJ4カマド

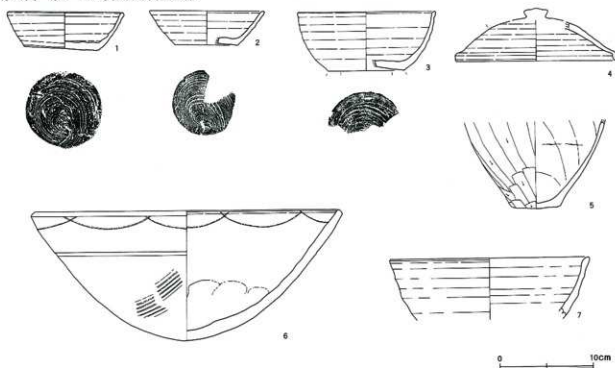
- 1 橙褐色土：焼土主体
- 2 茶褐色土
- 3 褐色土：ローム土主体

0 1m

第74図 第3・4号住居跡(2)



第75図 第3・4号住居跡出土土器



第3、4号住居跡 (第73・74・75図)

調査区北側の丘陵肩部のJ18・19区に位置しており、第2号住から南東方向へ約50m離れている。

第3号と第4号住は、ちょうど入れ子状に重複しており、北壁を除く、平面の形状がほぼ一致することから、拡張・建て替えを行ったものと考えられよう。

おそらく、北壁にカマドをもつ第4号住がつくれ、次にカマドを北壁から東壁に移し、北壁を拡張して第3号住がつくれたものと推定できる。

第3号住の平面の形状は、西壁より東壁の長いやや歪んだ方形で、規模は、長径3.61m、短径3.41m、深さは22cmである。主軸方位はN-75°-Wを指している。

カマドは、東壁の中央部につくれ、全長1.4m、焚口幅0.9mである。砂岩の角錐形をした支脚が出土した。

床面は平坦で、第4号住よりやや高くつくられているが、貼床は検出できなかった。壁溝と柱穴は、確認できなかった。

第4号住は、平面の形状が方形で、規模は、長径3.48m、短径2.75m、深さは22cmである。主軸方位はN-16°-Eを指している。

第11表 第3・4号住居跡出土土器観察表

番 号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存	備 考
75図-1	環	12.5	3.9	7.8	WB礫	A	淡青灰	100	回転糸切り未調整
-2	環	(12.2)	3.6	6.8	WG礫	B	黄灰	40	回転糸切り未調整
-3	椀	(14.6)	6.2	(8.2)	WG礫	A	灰白	40	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り
-4	蓋	16.9	(4.2)	—	WG針	A	灰	80	天井部回転ヘラ削り
-5	土師器甕	—	(9.2)	5.2	WG	B	にふい橙	40	
-6	鉢	(33.2)	13.8	—	WG	A	黄灰	20	口縁部内外面に木葉痕
-7	鉢	(21.4)	(6.6)	—	G	C	淡灰褐	25	

第5号住居跡 (第76、77図)

調査区北側の丘陵斜面を登った平坦部、G22区に位置しており、第3号住から南西方向へ約40m離れている。

住居の北西隅からカマドの一部が、中世の第20号土壇と重複しており、また中央部が南西から北東方向に伸びる溝により壊されている。

平面の形状は方形で、規模は、長径4.18m、短径3.18m、深さは23cmである。主軸方位はN-90°-Eを指している。

カマドは、西壁中央部につくれ、全長0.9m、焚口幅は推定0.6mの、比較的小型のものである。

床面は平坦で、中央から東よりの攪乱部で小ビット

カマドは、北壁の中央部につくられていたが、建て替え時に、床面の高さまで削られており、全長1.3m、焚口幅0.7mである。

遺物は、ほとんど第3号住の覆土から出土しており、識別個体数は22個体、土師器は甕8個体、須恵器は環5個体、椀1個体、蓋4個体、甕2個体、鉢2個体である。

第75図1、3、4、6はカマド内から、2、5は南壁ぎわからまとまって出土した。

1、2の環底部の調整は、全て糸きり後未調整で、口径に対する底径が、1/2以上である。3の椀底部は、糸切り後周辺をヘラ削りしている。5の鉢は、器形や口縁のつくりみると、甕をつくることを途中で止めて、鉢をつくったように思われる。口縁部の内外面に木葉痕を連続して施している。

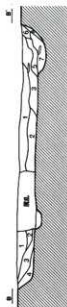
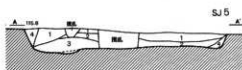
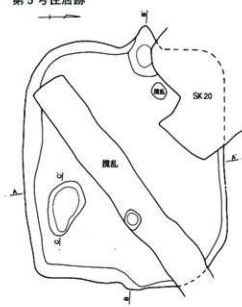
が1基が検出された。また、南西隅が楕円形の土壇状(長径88、短径56、深さ14cm)に掘り込まれていた。壁溝は確認できなかった。

遺物は、楕円形の掘り込み部周辺でややまとまりをもつものの、覆土上層から下層まで、散漫な出土状況であった。

識別個体数は28個体、土師器は甕7個体、須恵器は環10個体、椀1個体、高台付椀1個体、蓋8個体、甕1個体である。また、平瓦が20点余り出土した。

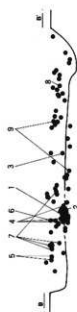
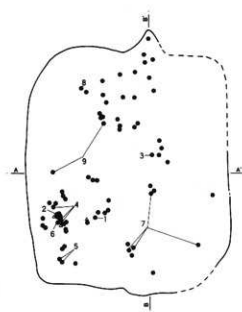
1～4の環底部の調整は、全て糸きり後未調整である。1は口径に対する底径が、1/2未満であり、4は1/2より大きくなる。

第76図 第5号住居跡



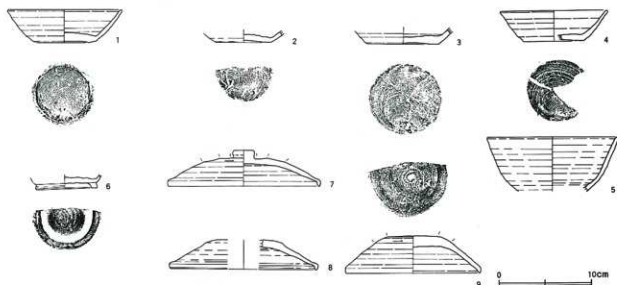
- 1 赤褐色土：焼土主体
- 2 褐色土：ローム土主体

- SJ 5
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 褐色土：ローム土主体
 - 5 暗褐色土：粘土
 - 6 褐色土：粘土
 - 7 褐色土：粘土
 - 8 灰褐色土：粘土主体



0 2m

第77図 第5号住居跡出土土器



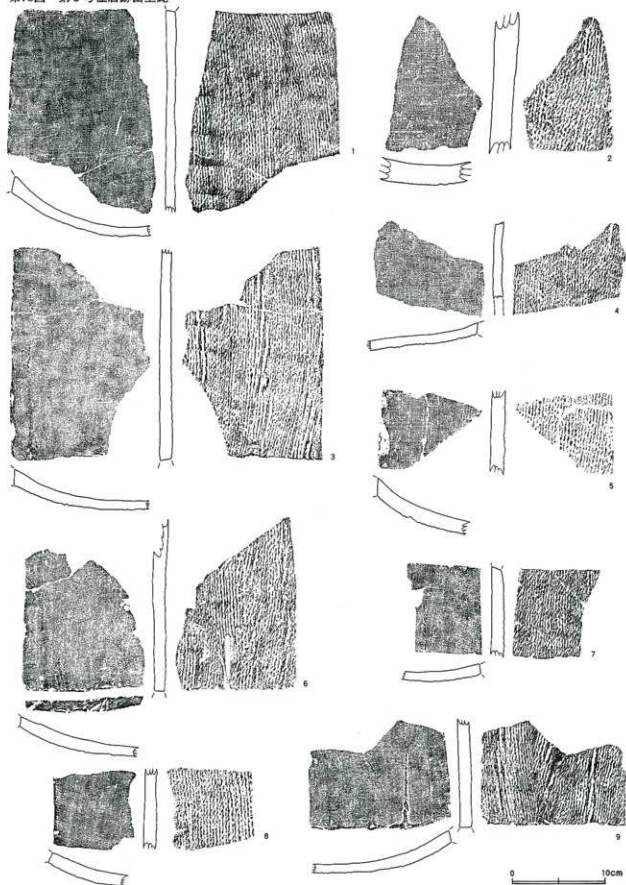
第12表 第5号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
77図-1	坏	(12.2)	3.5	5.8	WB	B	灰褐	60	回転系切り未調整
-2	坏	—	(1.3)	(6.0)	WB礫	B	青灰	50	回転系切り未調整
-3	坏	—	(1.8)	7.6	WG礫	B	灰白	85	回転系切り未調整
-4	坏	(11.5)	3.3	6.5	WG礫	A	灰	50	回転系切り未調整 ヘラ記号あり
-5	椀	(14.0)	(5.8)	—	WB礫	B	青灰	10	
-6	高台付椀	—	(1.4)	(6.7)	WG	B	青灰	50	
-7	蓋	(16.2)	3.8	—	WBG礫	A	灰白	40	天井部回転ヘラ削り
-8	蓋	(15.6)	(3.1)	—	WB	B	淡灰	10	天井部回転ヘラ削り
-9	蓋	(14.2)	3.9	—	WBG礫	B	浅黄	20	天井部回転系切り後、周辺回転ヘラ削り

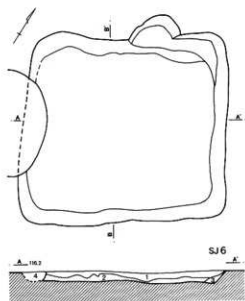
第13表 第5号住居跡出土土瓦観察表

番号	種類	縦長	横長	厚さ (cm)	胎土	地色	色調	残存	凹面	凸面	端面	側面
78図-1	平	—	—	0.8~1.4	A, B, C	I	灰色	約1/4	布目 29×30本	織目 10本	荒ケズリ	荒ケズリ
-2	平	—	—	2.1~2.5	A, B, F	III	橙色	破片	布目 21×21本	織目 9本	—	—
-3	平	—	—	0.9~1.5	A, B, D	I	灰色	約1/4	布目 30×30本	織目 11本	荒ケズリ	荒ケズリ
-4	平	—	—	0.9~1.1	A, B, D	I	暗灰色	破片	布目 28×28本	織目 12本	—	荒ケズリ
-5	平	—	—	1.4~1.5	A, B, F	III	淡橙色	破片	布目 22×23本	織目 9本	—	荒ケズリ
-6	平	—	—	1.0~1.3	A, B, C	II	灰白色	破片	布目 28×28本	織目 11本	荒ケズリ	荒ケズリ
-7	平	—	—	0.9~1.2	A, B, C, D	I	灰色	破片	布目 28×29本	織目 11本	荒ケズリ	荒ケズリ
-8	平	—	—	1.1~1.4	A, B, C	II	灰白色	破片	布目 28×25本	織目 9本	—	荒ケズリ
-9	平	—	—	0.9~1.3	A, B, D	I	灰色	破片	布目 29×29本	織目 12本	荒ケズリ	荒ケズリ

第78图 第5号住居跡出土瓦

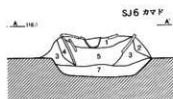
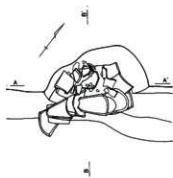
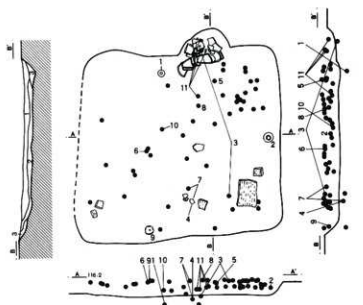


第79図 第6号住居跡



SJ6

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土：ローム土多
- 3 褐色土：ローム土主体
- 4 暗褐色土：(SC4覆土)



SJ6カマド

- 1 暗赤褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 赤褐色土：焼土主体
- 7 暗黄褐色土：ローム土主体



第6号住居跡 (第79～87図)

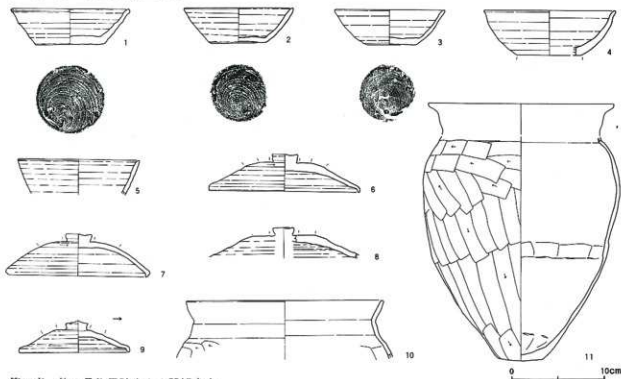
調査区北側の丘陵平坦部、H23区に位置しており、第5号住から南へ約8m離れている。

住居の西側で、中世の第4号集石と重複しており、西壁の一部は確認できなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長径3.23m、短径2.86m、深さは22cmである。主軸方位はN-57°-Eを指している。

カマドは、北壁中央からやや東よりにつくられ、全長1.1m、焚口幅0.8mである。カマドの構築部材には、瓦が使われていた。丸瓦2枚を重ね合わせて天井部とし、両脇に平瓦や丸瓦を立てて支えている。また、カ

第80図 第6号住居跡出土土器



第14表 第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
88図-1	環	12.7	3.7	7.2	WGB	B	淡褐色	100	回転糸切り未調整 ヘラ記号あり
-2	環	11.7	3.7	5.8	WBG礫	B	灰	100	回転糸切り未調整
-3	環	11.7	3.7	5.8	WG礫	A	灰黄褐	85	回転糸切り未調整
-4	環	(14.0)	4.7	(6.8)	WGB	A	灰白	15	体部下端回転ヘラ削り
-5	環	(13.0)	(3.7)	—	WBG礫	B	青灰	15	
-6	蓋	(16.0)	3.9	—	WG	A	灰	35	天井部回転ヘラ削り
-7	蓋	(14.6)	4.4	—	WB	A	灰	30	天井部回転ヘラ削り 歪みあり
-8	蓋	—	(3.0)	—	WG礫	B	淡茶褐	25	天井部回転ヘラ削り
-9	蓋	11.8	3.4	—	WGB	B	淡青灰	100	天井部回転ヘラ削り 歪みあり
-10	土師器甕	(21.0)	(6.2)	—	WGB	B	によう橙	10	
-11	土師器甕	—	(23.7)	4.8	WGB	B	黒褐	75	

マドの東側から北東隅まで、ローム土を掘り残した厚さ10cm程の高まりがある。

床面は、多少の起伏はあるが平坦で、柱穴や壁溝は確認できなかった。

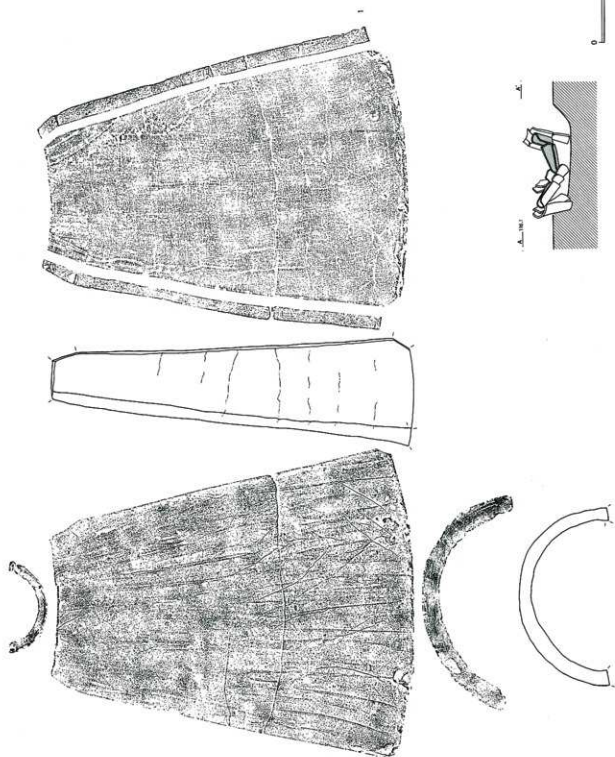
遺物は、住居北東隅のカマド周辺からややまとまって出土した。

識別個体数は41個体、土師器は甕8個体、壺2個体、須恵器は環14個体、碗3個体、蓋11個体、甕3個体である。また、丸瓦・平瓦合せて30点余り出土した。

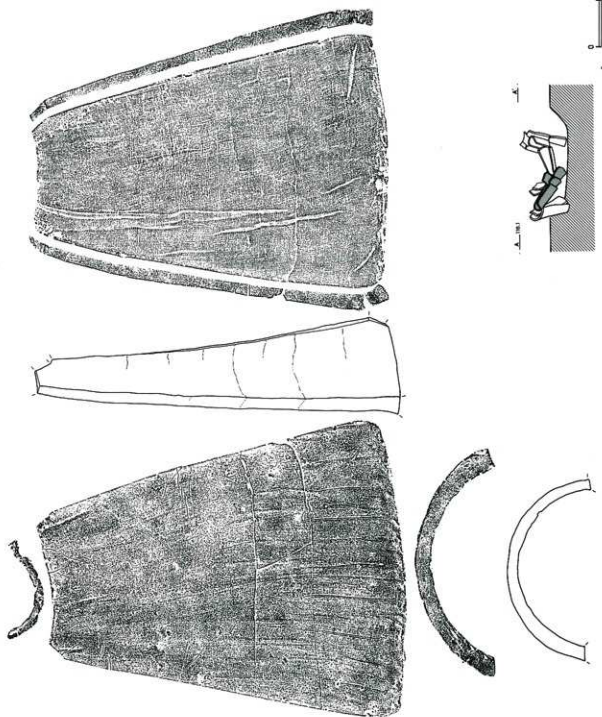
第84図の平瓦の完形個体は、住居南東隅に置かれたように、床面からやや浮いた状態で出土した。

第81図 第6号住居跡出土瓦(1)

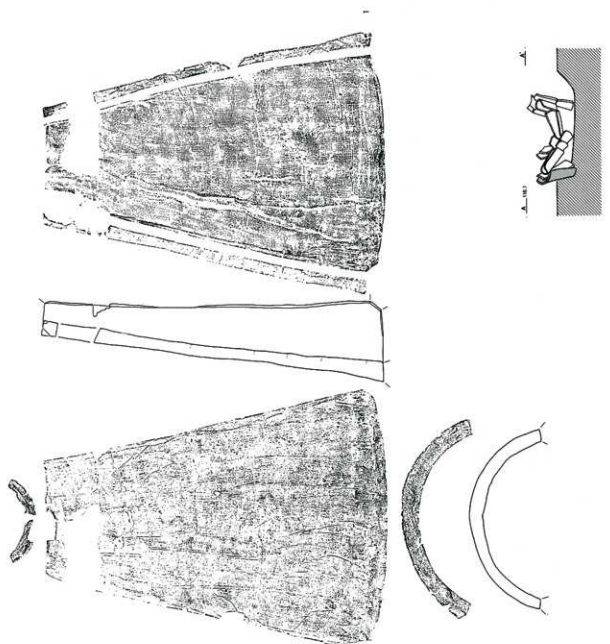
坂東山遺跡



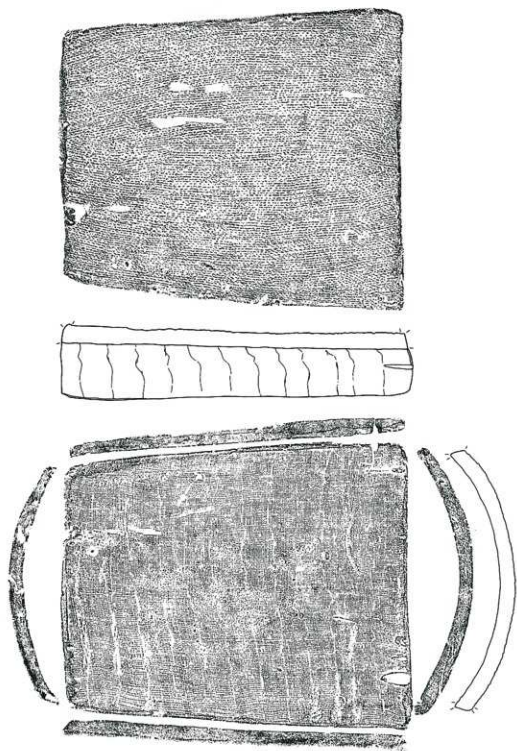
第82图 第6号住居跡出土瓦(2)



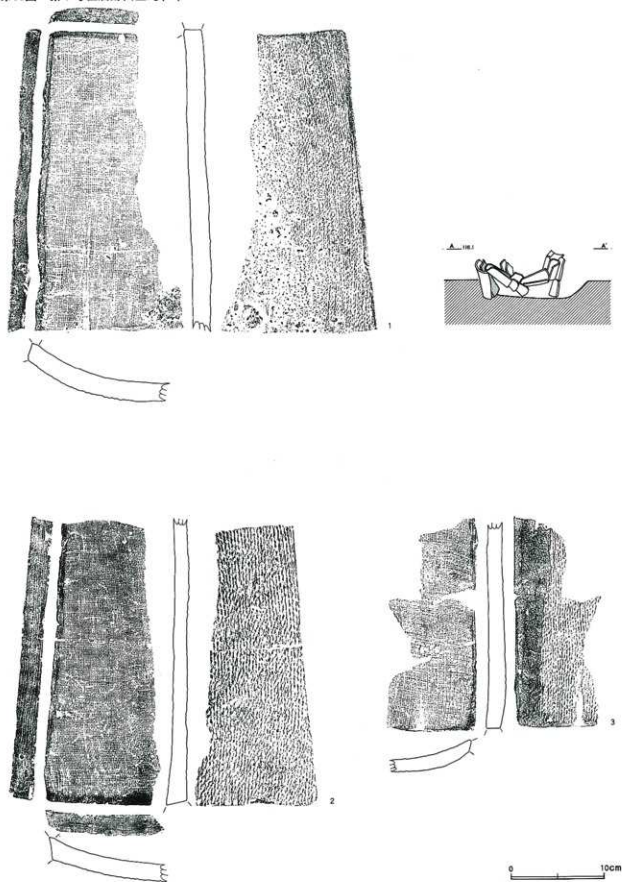
第83図 第6号住居跡出土瓦(3)



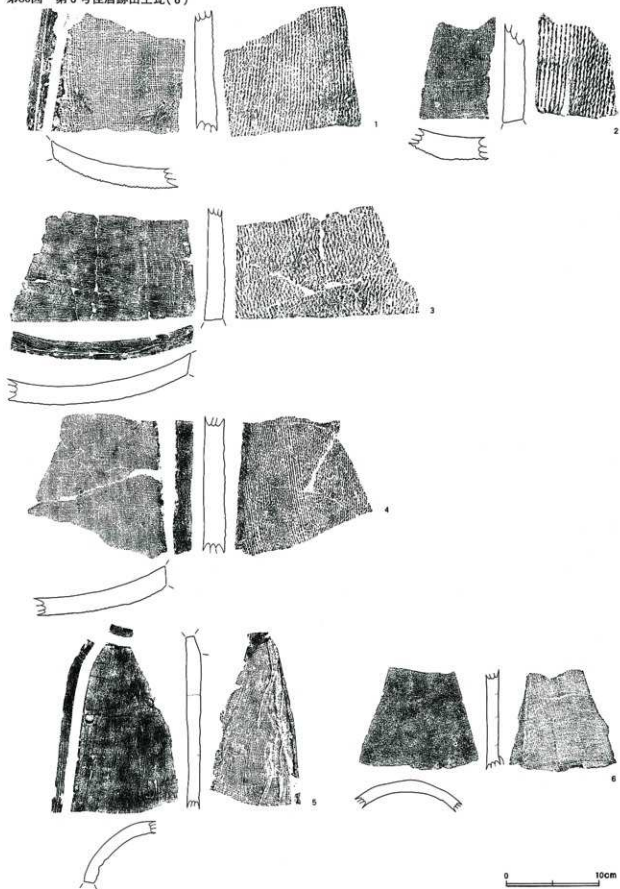
第84图 第6号住居跡出土瓦(4)



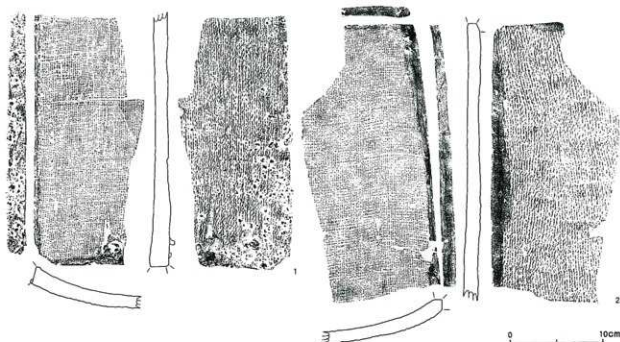
第85图 第6号住居跡出土瓦(5)



第86图 第6号住居跡出土瓦(6)



第87図 第6号住居跡出土瓦(7)



第15表 第6号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	胎土	地色	色調	残存	凹面		凸面	端面	側面
81図-1	丸	23.0	9.4	38.6	1.0~1.2	A, B, C	I	暗赤褐色	完形	布目 26×28本 粘土紐	筋調整 縦方向	荒ケズリ	荒ケズリ
82図-1	丸	24.0	9.2	38.6	0.9~1.5	A, B, C	I	暗赤褐色	完形	布目 27×28本 粘土紐	筋調整 縦方向	荒ケズリ	荒ケズリ
83図-1	丸	21.0	8.8	36.6	1.0~2.0	A, B, F	II	淡褐色	完形	布目 18×22本 周辺筋調整 粘土紐	筋調整 縦方向	荒ケズリ	荒ケズリ
84図-1	平	27.8	24.3	37.2	1.8	A, B, C	I	暗灰色	完形	布目 28×23本 杵底 粘土紐	横目 13本	荒ケズリ	荒ケズリ
85図-1	平	—	—	—	2.0	A, B	I	黒灰褐色	約片	布目 19×30本 周辺筋調整 粘土紐	横目 9本 自然軸付首	—	荒ケズリ
-2	平	—	—	—	1.3~2.1	A	II	灰白色	約片	布目 22×22本 周辺筋調整	横目 9本	荒ケズリ	荒ケズリ
-3	平	—	—	—	1.5~1.8	A, B	I	灰色	破片	布目 16×22本 周辺筋調整 粘土紐	横目 4本 周辺筋調整	荒ケズリ	荒ケズリ
86図-1	平	—	—	—	2.1	A, B	I	灰色	破片	布目 19×14本	横目 9本	—	荒ケズリ
-2	平	—	—	—	2.0~2.5	A, C	II	灰白色	破片	布目 25×27本	横目 7本	—	—
-3	平	—	—	—	1.4~2.1	A, C	II	灰褐色	破片	布目 17×22本 周辺筋調整 一部ナデ	横目 10本	—	—
-4	平	—	—	—	2.0~2.2	A, B	III	黄灰色	破片	布目 28×25本 周辺筋調整	横目 14本 周辺筋調整	—	—
-5	丸	—	—	—	1.2~1.5	A, C	II	灰褐色	破片	布目 19×21本 周辺筋調整 粘土紐	筋調整 縦方向	—	—
-6	丸	—	—	—	1.1~1.4	A, C	I	暗灰色	破片	布目 32×34本 杵底 粘土紐	丁寧ナデ調整 横目を消す	—	—
87図-1	平	—	—	—	1.5	A, C	II	灰白色	約片	布目 21×25 周辺筋調整	横目 9本	—	—
-2	平	—	—	—	1.2~1.4	A	II	灰白色	約片	布目 16×20 周辺筋調整	横目 11本 周辺筋調整	荒ケズリ	荒ケズリ

第7号住居跡 (第88・89図)

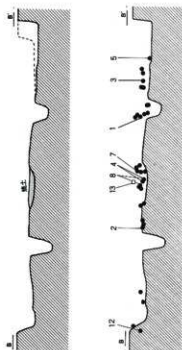
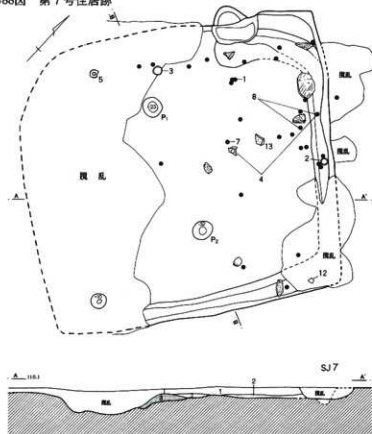
調査区北側の丘陵平坦部、G・H24区に位置しており、第6号住から南西方向へ約10m離れている。

住居北側が攪乱されており、東壁から南東隅そして南壁へ続く部分と、西壁の一部が検出できた。

平面の形状は方形と推定される。規模は、長径3.23m、短径2.86m、深さは22cmである。主軸方位はN-57°-Eを指している。

カマドは、東壁中央から南よりにつくられ、全長0.6m、焚口幅0.7mである。また、カマドの南側から南

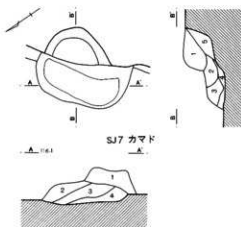
第88図 第7号住居跡



SJ7

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土：ローム土主体
- 3 暗赤褐色土：焼土主体

0 2m



SJ7 カマド

- 1 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム土、砂粒子
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土：ローム土主体
- 5 黄褐色土：ローム土、焼土粒子微

0 1m

東隅まで、ローム土を掘り残した厚さ10cm程の高まりがある。

床面は、北側が大きく壊されており、中央から南側で検出できた。多少の起伏はあるがほぼ平坦でる。

第89図 第7号住居跡出土土器・瓦

壁溝は、西壁から南壁にそって回り、カマドの掘り方に接続していた。

柱穴は、2基(P1,P2)検出できた。P1は、径16cm、深さ23cm、P2は、径17cm、深さ32cmであった。

